



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高齢化・固定化する森林ボランティアの活動における複層的な意味
Author(s)	藤田, 青空
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94306
Type	master thesis
File Information	2024fujita.pdf



令和6年度修士論文

高齢化・固定化する森林ボランティアの活動における
複層的な意味

文学院 人間科学専攻 地域科学研究室

指導教員 宮内 泰介

学生番号 13233093

氏 名 藤田 青空

目次

1 序章	3
1-1 研究の背景と目的	3
1-2 調査地概要	4
1-2-1 当別町概要	4
1-2-2 当別森林ボランティア「シラカンバ」概要	6
1-3 調査方法	9
1-4 本論文の構成	11
2 森林ボランティアの仕事と遊びが共存する活動	12
2-1 森林整備を通して得る多様な価値	12
2-2 森の遊びを地域に還元する	15
2-3 森林ボランティアとしての自覚	18
2-4 目の前の活動を楽しんだ先のボランティア	22
3 森林ボランティアが作る居場所	25
3-1 居場所の構成要素	25
3-1-1 森林ボランティアを通じてお互いを知る	25
3-1-2 自由に過ごせる雰囲気	27
3-1-3 役割を任う	30
3-1-4 森の空間が交流を生む	32
3-2 居場所の機能	33
3-2-1 自然とかかわり続けられる場所	33
3-2-2 仲間ができる場所	35
3-3 「社会的居場所」と森林ボランティア	37
4 森林ボランティアにとっての高齢化・固定化	39
4-1 会員の生活環境と森林ボランティアに所属すること	39

4-2	いつもの仲間と活動すること	42
4-3	複層的な意味を持つ森林ボランティア活動	44
5	結論	46
	参考文献	49

1 序章

1-1 研究の背景と目的

本研究は、北海道当別町で活動する森林ボランティアの「当別森林ボランティア「シラカシバ」」を対象に、①森林ボランティアの活動は、会員にとって、また、社会にとってどのような意義があるのか、②森林ボランティアのコミュニティは会員に何をもたらしているのか、を検討することを通して、森林ボランティアの課題である高齢化や固定化は、森林ボランティアにどのような影響を及ぼすのか、そして、森林ボランティア団体が高齢化や固定化にどのように適応しながら活動を続けているのかを明らかにすることを目的とする。

近年は、少子高齢化の流れとともに、ボランティア分野で高齢化に関する課題が顕在化している。環境保全にかかわるボランティアでは、2010年代頃から会員の高齢化や固定化が指摘されている。松村（2018）は、会員の高齢化の原因を、ライフコースの変化によるものとした。工業化社会の時代には、定年退職を迎えた後に、年金をもらいながらボランティア活動に参加することが容易であったのに対して、ポスト工業化社会では、画一的なライフコースを辿りづらくなっているという。小野（2013）は、会員の固定化の原因として、団体発足から時間を経て、世代の異なる会員との「感性や価値意識の共有」がうまくいなくなっていることや、メンバー間で時間を共有することが活動の第一の目的になってしまうことで、新入会員の参加を阻むことにつながっていることを示した。結果として、メンバーシップの対外閉鎖性や、活動の非継承性を生み、会員が高齢化した後に活動が続けられなくなる可能性を持っている。

会員の高齢化や固定化は、森林ボランティア¹の分野でも課題として取り上げられるようになっている。森林ボランティアは、1970年代頃から官製ボランティアとして下草刈りを実践する「草刈り十字軍」に端を発し、1980年半ばには手入れ不足の人工林に対する活動が東京都を中心に行われてきた（山本, 2014）。2000年代頃は、行政の事業として森林ボランティアを養成することが浸透していった。2006年の調査では、41の都道府県で森林ボランティアの育成を目指した研修や実習が実施され、受講が終了した後には活動継続の誘因がされていた（市川, 2009）。森林ボランティアが誕生してから時が経ち、組織の継続に課題を抱える団体が増えている。森林ボランティアの団体を対象にアンケートを行った調査では、1,624団体のうち965団体が、会員・参加者の確保に苦労していると回答していた（森

¹ 森林ボランティアの明確な定義はないが、日本林業調査会（1998）によると「一般市民の参加により、造林、育林などの森林での作業（森林や林業に関する普及啓発活動として行うものを含む）をボランティアで行うもの」と説明される。近年、森林ボランティアは、SDGsの取り組みの一環として企業の社会的責任(CSR)に注目が集まっていることもあり、2021年には3,671団体（植付け、下刈り、除伐、間伐、枝打ち等の作業を行っている団体を集計）に増加し、多様な主体による活動が拡大している（林野庁, 2024）。

づくりフォーラム,2019)。加えて、アンケートの自由記述の欄には、団体の課題として「会員の高齢化」が挙げられていた。このことから、森林ボランティアでも、上記の環境保全にかかわるボランティアと同様の傾向があることが推測される。

先行研究では、高齢化や固定化の問題に対して、緑地管理の人力不足という点（渡辺ほか, 2015）や前述したボランティア組織の継承という側面からの指摘にとどまっている。しかし、近年の森林ボランティアは、森林などの緑地管理の活動だけでなく、環境教育やレクリエーション活動など幅広い活動の種類があり、多様な視点で活動を捉える必要がある。加えて、ボランティア団体の課題として指摘される高齢化や固定化が、参加者個人の活動にも問題をもたらしているのかは明らかでない。

本研究は、森林ボランティアの高齢化・固定化を現場から考えることで、これらの問題を捉え直すことを目指す。これまで、環境社会学は、現場に立ち、当事者の目線からさまざまな環境と社会の間の問題を考える研究を蓄積してきた。宮内（2024）は、「問題」を現場から考える意義の一つとして、人びとの意味世界から「問題」を理解することで、問題の全体性、問題の多面性や、気づかなかった問題が見えてくることを指摘した。森林ボランティアの先行研究では、参加者と森林との関係性が豊かであることにより、1つの団体の中でも個人ごとに活動の意味づけが異なることを表したもの（富井, 2017）や、参加者の動機が多様であること（松村, 2007）が明らかになっており、森林ボランティアに参加している人たちの考えは一律でないと考えられる。そのため、参加者の多様な声を聞き、人びとの意味世界に分け入ることによって、当事者の視点から森林ボランティアの高齢化・固定化の問題を捉え直すことが必要であると考えた。したがって、本研究は、森林ボランティアのコミュニティの活動の様子を観察し、参加者個人の活動に対する意味づけを探ることを通して、高齢化・固定化する森林ボランティアが、森林ボランティアの参加者にとってどのような意味を持つものなのかを明らかにする。これまでに、森林ボランティアの高齢化・固定化の実態に迫った論文は少なく、団体の内面から活動を捉え直すことによって、新たな知見を得ることができると思う。

1-2 調査地概要

1-2-1 当別町概要

当別町は、石狩振興局の北東部に位置する町である。町域は、南北に 47km、東西に 26km と南北に長く、面積は 422.86 km²である²。当別町は、周りを、札幌市、江別市、石狩市、月形町、浦臼町、新十津川町、新篠津村に囲まれている。当別町の北部は、樺戸山地に属する山岳地帯である。南部は、平野が広がっており、農地や住宅地として利用されている。南北に縦断して流れる当別川は、町の南西部を流れる一級河川の石狩川に合流している。気候は、

² 「当別町地域防災計画」（当別町, 2024）より

北海道の中ではやや温暖であるが、冬は降雪量の多い準大陸性気候である。過去 10 年間（2012～2022 年）の年間平均降雪量は、872 cm となっており、特別豪雪地帯に指定されている³。

当別町は、鉄道や道路の整備も進められ、交通の重要拠点として機能している。町内には、国道 337 号、275 号、451 号が走り、近年の国道の延伸や拡張で、交通量は増加している。中でも、国道 337 号は、当別町を經由し、小樽と千歳を結ぶ「道央圏連絡道路」として整備が進められており、人流や物流の促進が期待されている⁴。2017 年には、「北欧の風 道の駅とうべつ」が国道 337 号沿いにオープンした。そして、JR 札沼線（学園都市線）の駅として「ロイズタウン駅」が 2022 年に開業し、交通の利便性が向上している。



図 1 当別町の位置

※国土地理院の地図をもとに筆者が加工

人口は、15,113 人⁵であり、減少傾向が見られる。これまで、当別町は、産業集積地と隣接していることもあり、札幌近郊のベッドタウンとして栄えてきた。1988 年に札幌大橋が開通したことをきっかけに、太美地区への人口流入が進み、2000 年時点には、人口が 20,778 人とピークに達した⁶。しかし、その後は人口減少が進み、現在の人口に至っている。近年では、「スウェーデンヒルズ」「スウェーデンガーデン」「当別田園住宅」「ゆとりっち稲穂」など、新築分譲地が複数整備されていることや、人口減少対策によって、子育て世帯の転入者が増加している。人口のバランスを見ると、転入者が増加しているものの、依然として高齢者の割合が高い状態が続いている。年少人口（0～14 歳）は、2019 年に 1,213 人となり、前年の 2018 年より 40 人増加した。しかし、2024 年時点では、65 歳以上の高齢者人口が 5,612 人となっており、人口の 36.6%が高齢者である⁷。今後も、高齢者人口の増加がみ込まれている。

当別町は、豊富な森林資源を有する町でもある。森林面積は 26,596ha あり、町の総面積の 62%を占めている。そのうち、国有林は 2,571ha、民有林は 24,025ha（一般民有林 13,657ha、道有林 10,350ha）となっている。一般民有林にある人工林の 82%がトドマツであり、多く

³ 上に同じ

⁴ 「道央圏連絡道路」（北海道開発局、2022）より

⁵ 2025 年 1 月現在。当別町 HP「行政区別男女別住民基本台帳人口」より

⁶ 「当別町人口ビジョン」（当別町、2015）より

⁷ 「第 9 期当別町高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」（当別町、2024）より

が木材の利用期を迎えているため、今後の利活用が求められている⁸。しかし、森林整備が順調に進んでいない状況がある。多くの森林所有者の所有規模が、小規模、分散型であることや、木材を運び出す路網の整備が十分でないことが理由である。そうした課題に対して、森林施業の共同化を図るため、森林ボランティア団体の活動場所の確保と施業実施協定の締結が推進されている。

また、北海道が持つ 11,889ha の森林を活用した「道民の森」は、当別町と月形町にまたがっている（そのうち当別町に属するのは 10,230ha）⁹。「道民の森」は、6 つの地区に分かれており、キャンプや森林体験学習、森づくり活動などのための施設やフィールドの整備がなされている。神居尻地区には牧草地跡があり、森林の復元による水源かん養機能を目的としたプロジェクトが進められている。中でも、環境保全への意識の高まりから、北海道と企業との間で協定を結び、森林づくりを行う活動が活発に行われてきた。2022 年までに、19 の協定が結ばれ、44,92ha に植栽が行われている¹⁰。近年では、「道民の森」への来場者の減少もあり、ボランティアなどと協力しながら、イベントや学習プログラムの充実が目指されている。

1-2-2 当別森林ボランティア「シラカンバ」概要

本研究の調査対象は、当別森林ボランティア「シラカンバ」およびその会員である（以下シラカンバ）。

シラカンバは、地球規模で環境汚染が進む中、森林の重要性が強まっていることを背景に、北海道の石狩森づくりセンター（現在は、石狩振興局森林室）が実施した「森林サポーター養成研修会」の受講者の有志 26 人によって 2005 年 6 月に設立された。

「森林サポーター養成研修会」は、2002 年から 3 年間行われ、体験を通して森づくりの技術・知識を学ぶ「森づくり活動」、森に入り樹木・植物・動物に触れ森林愛護の精神を学ぶ「森林愛護活動」の 2 つのテーマについて計 20 回講習が開かれた。シラカンバはそれらの知識をもとに現在の活動を展開している。設立に携わった会員は、講座に参加している時には、森林ボランティアを立ち上げることを想定していなかったという。しかし、講座の終了と同時に「そのまま活動を終えるのは、もったいない¹¹」という考えから設立に至った。シラカンバの設立直後は、北海道の職員が、シラカンバの活動に参加し、活動場所の確保や道具の貸し出しなど、活動のサポートを行ったこともあった。現在では、シラカンバが主体となって、活動基盤が整えられており、行政のサポートから自立した状態である。

表 1 は、シラカンバがこれまでに活動を行った場所をまとめたものである（現在作業を修

⁸ 「当別町森林整備計画」(当別町, 2023)より

⁹ 「令和 3 年「道民の森」の概要」(北海道石狩振興局森林室, 2023)より

¹⁰ 上に同じ

¹¹ 2023 年 9 月 4 日 A さんへの聞き取りより

了したものも含む)。設立当初は、行政側からの要請で活動地が決まっていたが、懇意にしていた行政職員が異動になるタイミングで活動が終了することもあり、1つの場所を継続して手入れすることが難しい状況があった。

「弁華別協働の森」は、当別町内で活動する森林ボランティア団体の「22世紀の森の会」と「キョウドウ」との3者で、森林整備を行っていた場所だ。2015年から「森林・山村多面的機能発揮対策事業」の支援を受けて、活動がされていたが、8年間の活動をもって活動期間が終わり、「弁華別協働の森」での協働作業は停止している。しかし、「22世紀の森の会」とは、交流が続いており、現在は「22世紀の森の会」の活動場所で協働作業が行われている。

表 1 過去の活動地と参画したプロジェクト

活動地およびプロジェクトの名称	所在地	2024 年度の活動実績
げんきの森	当別町	
ウダイカンバの森	当別町	
札幌南高等学校林	札幌市	
やなぎ君たのんだよ！植樹地	当別町	
和みの森	苫小牧	
森林ボランティアと創る石狩の豊かな里山モデル事業	札幌市、当別町	
あいの里東中植樹地	道民の森 神居尻地区	
石狩川下流当別地区自然再生事業	当別町	
当別町立弁華別中学校 森林学習支援	当別町	
弁華別協働の森	当別町	
140年の森	当別町	○
22世紀の森	当別町	○
Fの森	道民の森 神居尻地区	○
野布瀬の森	当別町	○
会員私有の山林		○

(出所) シラカンバ機関紙「森の息吹」より

ここからは、シラカンバの現在の活動に焦点を当てて、活動の概要を示す。シラカンバの活動は、「木に触れて、林で遊び、森と育つ」という三本の理念をもとに活動が続けられてきた。シラカンバのホームページには、理念のもととなる活動への取り組み方について説明された文章がある。

「シラカンバ」は自主的に森づくりに参加し、自らの責任において判断、行動している小さな集まりです。会員の出発点は、あくまでも森づくりの自主的な参加であり、その動機や関わり方もさまざまです。活動している森は、主に当別町内の狭い

エリアを対象としています。好きなことをしていい汗をかいて、気持ちよくなって元気な森をつくる…。私たちが行う活動は、量的にも質的にも限界があり、その成果はほとんど目に見えませんが、森に入ることが好きな人たちが集まり、言わば趣味の世界で楽しみながら地味で目立たない活動をしています¹²。

団体として森林整備の範囲には限りがあることを自覚しながらも、森に入る機会を多くし、楽しみながら森づくりをしてきたことがわかる。シラカンバの活動は、当別町内での森林整備活動、森での子どもたちとの交流、炭焼きなどのレクリエーションを中心に行われている。過去の活動では、当別町外の活動地もあったのに対して、現在では、当別町内のみになっている。森林整備活動と子供たちとの交流の活動の詳しい活動内容は、2章で後述する。

ここでは、活動を行っている場所の地図（図2）と、1年間のスケジュール（図3）を示した。活動地は、当別町に集中しているが、当別町が南北に長い形をしているため、会員が多く住んでいる市街地からは車で30分以上移動にかかる場所もある。

スケジュールには、「森林整備」、「地域活動」、活動の中で会員が楽しんでいる自然の恵みを収穫することを「趣味」として3つに分けて示した。会員の中で、趣味として多く楽しまれている山菜やきのこの収穫時期には、作業の合間に収穫を楽しむこともある。

シラカンバは、一年間に25回ほど活動が行われている。そのほとんどが当別町内での活動である。冬は雪が積もるため、森林整備活動を行っておらず、活動回数は6月から7月に集中している。春は植樹、夏は草刈り、秋から冬にかけてはイベントへの参加というのが、およそそのサイクルになっている。

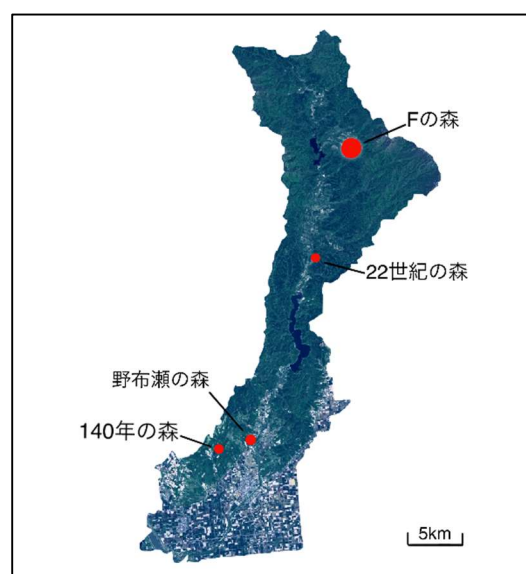


図2 当別町内の活動地の位置

（出所）国土地理院の地図をもとに筆者が加工

¹² 当別森林ボランティア「シラカンバ」ホームページより

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
森林整備	植樹		草刈り		草刈り							
地域活動					バザー	出店				交流イベント		
趣味	山菜						きのこ					

図 3 シラカンバの一年間のスケジュール

1-3 調査方法

本研究は、2023 年 4 月から 2024 年 12 月までの間に調査を行い、①森林ボランティアに関する文献調査、②シラカンバの会員および関係者に対する聞き取り調査、③シラカンバの活動への参与観察を実施した。それぞれの調査方法について、以下に説明する。

まず、森林ボランティア（里山ボランティアも含む）の先行研究を調査し、研究分野の整理を行った。加えて、シラカンバに対する理解を深めるために、シラカンバが発行する会報「森の息吹」も閲覧した。

次に、シラカンバの会員に聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、調査に応じてくださった 13 名に、録音の許可を得たうえで実施した。調査対象者の概要は、表 2 の通りである。聞き取り調査の方法は、半構造化インタビューの形式をとった。実施した時間は、それぞれ 1 時間から 1 時間半程度である。さらに、炭焼きの活動に参加していた 9 名の会員には、グループインタビューにも応じてもらった。

その他、シラカンバの関係者として、シラカンバに作業協力の要請をしている M さんにも聞き取りを行った（M さんはシラカンバの会員として登録されているため、他の会員と同じく概要を表 2 に示した）。加えて、F の森のコーディネーターをつとめる N さんに、2024 年 6 月 23 日の作業途中にお話を聞いた。

表 2 シラカンバの聞き取り対象者一覧

対象者	生年	性別	現住所	入会年	役職	出生地	聞き取り日時
A さん	1936	男性	当別町	2005	会長	福島県	2023/9/4
B さん	1940	男性	札幌市	2005	副会長	福岡県	2023/7/22 2023/12/1
C1 さん	1954	女性	小樽市	2005		北海道	2023/7/22 2023/11/15
C2 さん	1955	男性	小樽市	2005		北海道	2023/7/22 2023/11/15
D さん	1949	男性	札幌市	2005		北海道	2024/1/16
E さん	1941	男性	当別町	2007		北海道	2023/7/22 2023/11/14
F さん	1952	男性	当別町	2010	事務局	兵庫県	2023/7/22 2023/11/9
G さん	1945	男性	当別町	2012	会計	青森県	2023/7/22 2024/7/27
H さん	1960	男性	当別町	2012		北海道	2023/7/22 2023/11/26
I さん	1949	男性	当別町	2015		長野県	2023/7/22
J さん	1950	男性	当別町	2016		北海道	2023/11/13
K さん	1952	男性	当別町	2016		千葉県	2023/7/22 2023/11/23
L さん	1957	男性	当別町	2023		奈良県	2023/11/19
M さん	1978	男性	当別町	2023		島根県	2024/8/3

また、聞き取り調査の他に、シラカンバの活動の参与観察を行った。参与観察は、活動内容や活動時における会員間の雰囲気や関係性を探るために行った。筆者は、2023 年 5 月から 2024 年 12 月までの間に、シラカンバの定例活動へ 23 回参加した。参与観察中には、作業の様子を観察するとともに、筆者が作業に従事することもあった。なお、参与観察中に見聞きした内容も、本研究のデータとして参照している。参与観察の実施日と内容は、表 3 に示した。

表 3 参与観察の実施内容¹³

参与観察実施日	観察内容
2023/5/28	140 年の森 植樹作業
2023/6/4	弁華別協働の森での下草刈り作業
2023/7/9	F の森 草刈り作業
2023/7/16	炭焼き準備
2023/7/22-23	炭焼き
2023/8/27	福祉祭り準備
2023/9/23	野布瀬の森 森林整備活動
2023/11/12	備品整備・機械のメンテナンス
2023/12/1	野布瀬の森のイベントに参加
2023/12/10	反省会・交流会
2024/2/24	「ぺこちゃん雪まつり」イグルー作り
2023/3/5	ユープさっぽろ 森づくり交流会
2024/3/23	総会
2024/5/19	野布瀬の森のイベントに参加
2024/5/26	140 年の森 植樹作業
2024/6/23	F の森 つぼ刈り作業
2024/7/7	野布瀬の森 草刈り作業
2024/7/27	炭焼き
2024/8/3	炭の窯出し作業
2024/9/7	福祉まつり
2024/9/14	救命救急講習会
2024/11/2	野布瀬の森のイベントに参加
2024/12/15	反省会・交流会

1-4 本論文の構成

本論文は、聞き取り調査と参与観察より明らかになった結果を、第 2 章から第 4 章に分けて記述した。第 2 章は、シラカンバが行っているさまざまな森林ボランティアの活動に対して、森林ボランティア活動の様子の観察や、会員の活動に対する意味づけを明らかにすることを通して、森林ボランティアはどのような意義を持つ活動なのかを考察した。第 3 章では、森林ボランティアのコミュニティに対する記述を居場所として解釈し、居場所の構成要素を明らかにするとともに、会員にとって、居場所がどのような意味を持つものなのかを記述した。第 4 章では、これまでの議論をもとに、森林ボランティアにとって高齢化や固定化はどのようなものであるか捉え直すことを目的に総合考察を行った。

¹³ 本研究では、草を刈る作業を「草刈り」「下草刈り」「つぼ刈り」に分類して表現している。「草刈り」は、単純に雑草を刈り取る作業のことを示す。「下草刈り」は、成木になる前の苗木の周りや苗木の下を刈り取る作業のこと、「つぼ刈り」は、下草刈りの中でも、苗木の周りを円形に刈り取る作業のこととして表す。これらの表現は、シラカンバの活動内容に依拠したものである。

2 森林ボランティアの仕事と遊びが共存する活動

2-1 森林整備を通して得る多様な価値

本章は、森林ボランティアの活動が多面的な価値を持つことに着目し、森林ボランティア活動の様子を観察や、会員の活動に対する意味づけから、森林ボランティアはどのような意義を持つ活動なのかを明らかにすることを目的としている。

これまでの森林ボランティアの先行研究では、森林ボランティアを森林の利用や管理の視点から議論するものが多かった。森林ボランティアは、森林整備の担い手や、森林利用に関する政策提言などを行う市民活動の一つとして（山本, 2014）、また山村住民や林業関係者との関係性の構築を通じて山村地域の活性化をもたらす存在（嶋田, 2005; 堀内・森野, 2009）としてみられている。しかし、参加者は、森林ボランティアの活動を必ずしも社会貢献や社会運動として位置付けているわけではないことが指摘されている。富井

（2017）は、参加者が活動の実践を自然保全や環境問題などの社会的意義ではなく、個別の関心に応じて自由に意味づけがなされていることを明らかにした。また、森林ボランティアは奉仕活動を軸としたボランティアとしてではなく、山仕事を楽しみ、遊ぶ感覚を大切に活動する「レジャー林業」である（羽鳥, 2001）との考え方もある。

先行研究より、森林ボランティアは、森林に関する社会問題の解決に向けた活動であるとともに、参加者にとっては自然環境とのかかわりにおいて楽しみを見出していく場でもあり、多面的な価値があると考えられる。この点において、森林ボランティアは活動内容が拡大しているため、多岐に渡る活動内容のそれぞれにおいても、会員がどのように意義を見出しているのかを明らかにする必要がある。そのために、シラカンバが森林ボランティアとしてどのような活動を行っているのかに触れつつ、会員に活動内容がどのように受け止められているのかを分析する。加えて、外部の関係者から、シラカンバはどのように評価されているのかについて記述していく。また、聞き取り調査だけではなく、実際の活動を観察することを通して、それぞれの活動の営みの具体的な記述から意義を見出すことを目指す。

第1節では、シラカンバが行っている森林整備の活動に焦点を当て、会員たちがそこにどのような価値を見出しているのかを考えたい。シラカンバは、下草刈りと呼ばれる作業を主に行ってきた。この作業は、植樹した苗の周りに生えている草を刈り取る作業で、周りの草によって苗に当たる日光が遮られてしまうことのないようにする目的がある。シラカンバでは、会員が一人一台ずつ電動草刈機を持って作業している。毎回の活動は10人前後の参加があり、午前中の2～3時間で作業を行うのが通常の流れだ。

会員の中の一部には、個人で山林を所有しているために、作業に慣れている人もいるが、生業として林業に従事している人はいない。ほとんどの会員が初心者からのスタート

であり、電動草刈機の使い方や植樹の方法は講習を受けたり、先輩の会員から学ぶなどして技術を向上させてきた。

このような森林ボランティアの活動に対して、会員はどのように意義を見出しているのだろうか。大きく分けて、新たな経験を得られること、自然について学ぶこと、作業後の達成感について会員は語っていた。

まず、新たな経験を得られることについては、森林ボランティアに入るまで森林保全に携わってこなかった会員にとって、初めての経験として活動の楽しさを感じていたと考えられる。森林ボランティアの活動は、山深い場所に入って、自分たちで草刈りや植樹を行うことが基本であり、林業に従事しない人にとっては、活動そのものが非日常の体験の連続だ。田舎暮らしに憧れて当別町に移住してきた背景がある F さんは、「チェーンソーの講習に行かせてもらったり、刈払機を使ったりするのは楽しかった¹⁴」と語る。都市部に住んでいた人たちにとっては、豊かな自然環境に囲まれることが一つの憧れでもあり、その自然や樹木を観賞の対象として見るだけでなく、自分で手入れできることが喜びになっている。植樹や草刈りといった森づくりに関する作業、そしてチェーンソーなどの機械を使用できることが、日常生活では体験できないという意味で活動の魅力の一つとして受け止められている。

次に、シラカンバの会員は、森林ボランティアの活動や、さまざまな交流の中で森についての知識を得る機会があることに意義を見出している。以前から他団体が主催する植樹や草刈りのイベントに参加し、森林や植物に関心を持っている D さんは、シラカンバに加入することで森の整備について学ぶことができたという。

山のことを知りたい、体感したいみたいな。それから、山の仕事がどんなのがあるのか知らないことがあったので、それも面白かったのかな¹⁵。

D さんは、作業を体験することと共に、森林ボランティアの活動の中で外部の関係者との交流が生まれ、より深い知識を得ることができたことも挙げていた。シラカンバは、単独で行う作業とは別に、他の森林ボランティアと共に作業を行うこともある。他の団体には、林業や木の植生について詳しい参加者もいるため、シラカンバの会員が作業の合間に質問をするといった場面も見られた。そうしたことから、シラカンバに入ることによって得られる知識や機会がある。

森林ボランティアを通して森について知ることは、単に知識ということだけでなく、実践を経て知見を得るという側面もある。毎年、植樹を行ったり、下草刈りなどの手入れをしていても、順調に育つ木ばかりではなく、失敗することもある。うまく土に根がつかず枯れてしまう苗や、シカやネズミなどの動物によって樹皮が剥がされてしまったものもあ

¹⁴ 2023 年 11 月 9 日 F さんへの聞き取りより

¹⁵ 2024 年 1 月 16 日 D さんへの聞き取りより

った。特に、当別町は多雪地域であり、雪の重みによって苗がまっすぐに育たない場合もある。Aさんは、なかなか順調にはいかない森づくりを経験した上で、活動を積み重ねながら木や森のあり方を学んでいることを語った。

どういう森にしようっていうことに向かっているんじゃないくて、森っていうのがどのように出来ているのかを、我々が逆に教えられている。場所に合った樹木が育って、合わないのは淘汰されていくのかなみたいなこともそこから分かってきますしね¹⁶。

140年の森は、シラカンバが当別町の町有林を一部借りて、森づくりを行っているフィールドである。シラカンバが自分たちで植えるものを決めるなど、他に携わっているフィールドとは異なり、シラカンバの会員が主導権を持って森づくりを手がけている場所だ。そのため、木の育ち方を見ながら、毎年植える樹種を変え、試行錯誤を繰り返すことが可能になっている。140年の森において、シラカンバは森づくりの成功だけをゴールとするのではなく、現場で森や自然のありようを学ぶことも一つの目的として活動を行っている。

その他、作業に関する楽しさについて言及する会員もいた。C1さんは、草刈りの作業を行った後に、刈った後の景色を見ることで気持ちの良さを感じていることを語った。

私は、やった後に疲れるけど、なんかやった感があって。それがなんかすごい気持ちよかった。私は中でも1番好きな作業は刈り払いなんだけど、なぜかという、きれいに刈ったらその後すぐ見たらきれいじゃないですか¹⁷。

草刈りは、歩くことも大変なほどの笹が密集して生えているところをきれいに刈り、作業が終わると、見通しが良くなっており、作業前と比べてきれいになったと達成感を感じることができる作業だ。同時に、自分たちで草刈りをした場所に心地の良さを感じることができている。同じく、Gさんは「今日も無事にボランティア終わったなって、なんちゅうか、達成感とか、そういったものを感じたね。飽きないんだわ。なぜか¹⁸」と語った。森林ボランティアの作業の活動が終わる毎に達成感が生まれており、その感情を感じられることが会員にとって充実をもたらす一つの要素になっている。

以上、会員は森林ボランティアの活動に対して、多様な意義を見出していることがわかった。森づくりを通して、新たな経験を得られること、作業後の達成感、自然について学ぶということが生まれている。作業後の達成感は、会員にとって活動を継続する動機にも

¹⁶ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

¹⁷ 2023年11月15日 C1さんへの聞き取りより

¹⁸ 2024年7月28日 Gさんへの聞き取りより

なっていた。また、新たな経験を得られることや自然について学ぶことができる点については、活動を繰り返し参加することによって得られる意義であると考えられる。こうした森林ボランティアならではの活動から得られる意義は、多様であり、さまざまな会員の欲求にこたえていた。

2-2 森の遊びを地域に還元する

シラカンバの活動として、森林整備活動の他に、子どもたちと森で遊ぶ活動や、地域のバザーに出店するなどの活動を行っている。これらの活動は、前述した森林整備の下草刈り作業と異なる趣旨で行われているが、シラカンバにとってどのような意味があるのだろうか。ここでは、この点について、子どもたちと森で遊ぶ活動、地域の雪まつりへの協力、地域のバザーへの出店に分けて、聞き取りと参与観察から明らかにしたい。

まず、子どもたちと森の中で遊ぶ活動は、当別町内にある社会福祉法人ゆうゆうという団体とつながりを持ったことを契機として始まった。社会福祉法人ゆうゆうは、福祉サービスの提供を行う団体である。その活動のうち、森の中で子どもたちと遊ぶイベントを年に数回実施してきた。社会福祉法人ゆうゆうが持つ「野布瀬の森」は当別町にあり、シラカンバの活動拠点としている場所からも車で5分程度の場所にある。そこでシラカンバは、子どもたちが遊べる広場を森林の中に作り、イベント当日のお手伝いを行ってきた。たとえば、2024年5月に行われた植樹イベントでは、親子連れ30名ほどが集まり、シラカンバの会員が植樹の仕方を指導しながら、カラマツを植えた。当別町内の子どもたちに加えて、知的障がいを持った青年2名がこのイベントに参加していた。さまざまな立場の人たちが混ざりながらイベントが行われ、その中でシラカンバの会員は、森林ボランティアとしてスコップの使い方や、子どもたちに声をかけながら植える場所を教える様子も見られた。

シラカンバに協力をお願いした理由として、社会福祉法人ゆうゆうのMさんは、次のように話した。

皆さん、森のいろんな知恵を知ってるっていうのがあったし、人手っていうか、安心してね、子どもたちを入れるのにはいっぱい人がいた方がいいし。森の整備も届いてなかった。そこを手伝ってほしいなと思って¹⁹。

森に子どもたちを入れるには、笹で体を傷つけないように、通常よりも根の近くまで笹を刈ることが求められるため、普段の作業よりも丁寧に行わなければならない。社会福祉法人ゆうゆうの中で、機械を使って森の整備を行うことができるのは、Mさんを含めて2

¹⁹ 2024年8月3日 Mさんへの聞き取りより

人のみとなっており、広いイベントスペースを整備するにはシラカンバが森林整備に必要な人手となっている。

また、イベントの実施中には、けがや迷子の防止のために、常に子どもたちに目を配っておく必要がある。クマの出没情報が多い時期には、保護者から心配の声が聞かれるため、さまざまな面で安全を確保するために大勢の大人による見張りが必要になっている。このように、子どもたちを連れて森林でイベントをするには、森林整備を含めて、安全を確保するための準備が不可欠であり、十分な大人の人数を確保するためにシラカンバが力になっている。

シラカンバの会員は、森での遊び方の知識を持っている点でも、イベントでの重要な役割を担っている。イベントでは、植樹の指導を行うだけでなく、子どもたちに森での遊び方を教えるなどの交流も行っている。たとえば、イベント中に行っていた焚き木に興味を示した子どもに、木の皮がよく燃えることを教えたりして、森での遊び方を伝えていた。また、イベントの最後には、地域のおばあちゃんたちが作った食事が振る舞われるのが恒例で、森の中で子どもたちと昼食を取ったり、焚き木でマシュマロを一緒に焼くなど楽しむ様子が見られた²⁰。他にも、地元の高校生が総合的な探求の時間の授業の一環で、社会福祉法人ゆうゆうの企画した森林に触れる体験を行う際に、シラカンバの会員も地元のおじいちゃんたちとして参加していた。この体験は、あらかじめ切られている松の木からクリスマスツリーを作るという目的で行われ、会員は高校生たちへのこぎりやドリルの使い方を教えながら一緒に作業を行っていた。こうした工具の使い方や森での遊び方の知識は、森林ボランティア活動の実践で培われてきたものや、会員たちのこれまでの生活から得られたものがもとになっている。登山経験を持つ人は、森の中にあるものを使いながら煮炊きをする方法を知っていたりする。その他にも、幼少期に里山で遊んでいた経験から、自然の環境にあるものを活用して遊ぶことに慣れている会員もいる。こうした知識や経験は、イベントを通して地域の子どものために伝達されており、自然環境と触れ合うという面での森林教育にもなっている。

また、このような活動に対して、Gさんは、若い人たちと触れ合える機会としてシラカンバの会員にとっても重要であることを語った。

Mさんの所で、子どもたち連れてさ、イベントやってるでしょ。これからのボランティア、シラカンバ続けるためには欠かせないと思うね。やっぱ若い人と触れ合うことって楽しいわ。歳行ってくると特に²¹。

シラカンバの会員の多くが60歳を超えていることを踏まえると、こうしたイベントに参加することは、未就学児やその保護者、高校生などとの幅広い年代の参加者とかかわる

²⁰ 2024年11月2日 参与観察より

²¹ 2024年7月28日 Gさんへの聞き取りより

ことができる貴重な機会である。このようなイベントは、多くの会員の中で前向きに捉えられていた。下草刈りの作業に比べると、交流を中心とした活動のため体力面でも無理をせずに参加できるため、今後のシラカンバの活動として定着させていきたいという声もあった。

その他に、2月に行われる社会福祉法人ゆうゆうの雪まつりにも、シラカンバとして参加し、圧雪した雪のブロックを積み上げて作るイグルーというドーム状の家を作っている。イベント当日には、地域の子どもたちが、イグルーの中に入って遊んでいる様子が見られた²²。森づくりとは離れた活動ではあるが、もともとシラカンバは冬場の活動としてイグルー作りを行っていたため、その経験を生かして、子どもたちの遊び場を提供している。Aさんは、森林ボランティアの活動の一つとして雪まつりにも参加していることを、地域とのつながりを大切にしたいという思いから行っているものだと説明した。

ぺこぺこの畑の雪まつりなんかにも参加するっていうのは、直接森と関係ないんですけども。地域の人たちと繋がって、我々持ってるその技術、たとえばイグルー作りだとかいうのが、毎年作ってるんで慣れてますから。それを作って、子どもたちと一緒に作って、中に入って楽しもうみたいなことで。いわゆる地域との繋がりもできてきますんでね、森と直接関係なくても、そういったのを通じて地域と輪を広げていくみたいな²³。

雪まつりでは、社会福祉法人ゆうゆうに関わる他のボランティアも多く参加しており、イベント中にも他の参加者と談笑している様子が見られた。このことによって、森林ボランティア活動の枠に囚われず、地域のイベントに積極的に参加することによって幅広く地域の人とつながりを持つことができています。この点は、雪まつりだけでなく当別町内のバザーである「福祉まつり」にも共通している。バザーに出店する際には、シラカンバの活動で作った木炭や、シイタケ、スウェーデントーチ（垂直の切り込みを入れる加工を施した丸太で、焚き火を楽しむためのもの）などが販売される。シラカンバは毎年出店しているため、毎年来場する人たちから知られた存在になっており、特定の品物を求めて買いに来るリピーターのお客さんがいた。こうした地域のイベントを通して、シラカンバは地域とのさまざまな交流を増やしている²⁴。

本節では、子どもたちと森で遊ぶ活動、地域の雪まつりへの協力、地域のバザーへの出店について見てきた。それぞれの活動は、森林整備の活動とは異なり地域との交流を軸に展開された活動であった。子どもたちと遊ぶ活動では、森林ボランティア活動でこれまでに培ってきた植樹の方法や森での遊び方を未就学児や高校生に教えるといったものだっ

²² 2024年2月24日 参与観察より

²³ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

²⁴ 2024年9月7日 参与観察より

た。地域の雪まつりもこれまでの経験を生かすという意味では共通しており、シラカンバで行ってきたイグルー作りの活動が派生して、地域との交流を生んでいた。地域のバザーへの出店は、炭焼きなどの活動で得られたものを商品として販売している。これら3つの活動は、会員が森の中で得られた産物や遊びの経験を地域の人々に還元する活動とも言える。

2-3 森林ボランティアとしての自覚

シラカンバは、森林ボランティア団体としての社会的意義をどのように果たしてきたのだろうか。森林ボランティアの社会的意義に関してまとめた富井（2017）は、森林ボランティアは「林業・木材産業の活性化や、地域の活性化」、「林野行政への市民参加の実現」、「環境保全や生物多様性保全の担いとしてのはたらき」において期待が寄せられてきたことを示した。ここでは、会員と、シラカンバと共に活動を行う外部関係者の語りから、シラカンバが果たす社会的意義について考えてみたい。

森林ボランティアとして活動してきたシラカンバは、これまでの経験を経て、自分たちの団体が森づくりの力となっていることを自覚している。GさんとJさんは、他のボランティア活動と比較しながら、シラカンバの働きについて語った。

Gさん：俺、別に（当別町のボランティア団体に所属して）ね、そういう認知症の人のサポートしたりするんだけどね。登録している人はいるけどね、実際活動してる人は微々たるもので決まってしまってたよね。ここみたいにね、毎回10人前後って集まらないから。ここは大体10人くらい集まってるもんね。

Jさん：ここ見てるとさ、うちの人はみんな働く。他のところはね、もう単なる遊びに来てるもんね。

Gさん：だからこう続いていると思うんだよ。ほんとここ一生懸命でね、集まりもいいしね。私はボランティア活動で優秀な方じゃないかなと思って²⁵。

GさんとJさんはそれぞれ、シラカンバの人数の集まりの良さ、仕事への熱心さを評価している。毎回の活動日にまとまった人数が参加することというのは、作業も効率的に進めることにつながっている。シラカンバの活動毎の出席人数は、表4にまとめた。毎回10名程度の参加者があり、10名を下回る日は、2023年の活動日のうち8日間のみであった。全体の活動日が25回あることを考えれば、人数の面であまり困ることはない。また、会員の熱心さは、会員自身も自覚していた。シラカンバは、自然環境へ興味がある人

²⁵ 2024年7月28日 参与観察より

ばかりが参加しているわけではなく、多様な関心によって集まっている団体である。しかし、どんな理由で参加していても、任された仕事は熱心に取り組むといった雰囲気がある。Jさんの語りの中で、他の団体は遊びに来ていと認識している内容があった。これは、シラカンバが他の団体と一緒に活動する中で感じたものと思われる。作業への取り組み方や、活動を行う際の恰好などを見て違いを感じたという²⁶。シラカンバが行う作業は遊びではなく、仕事と認識されていると考えることができるだろう。

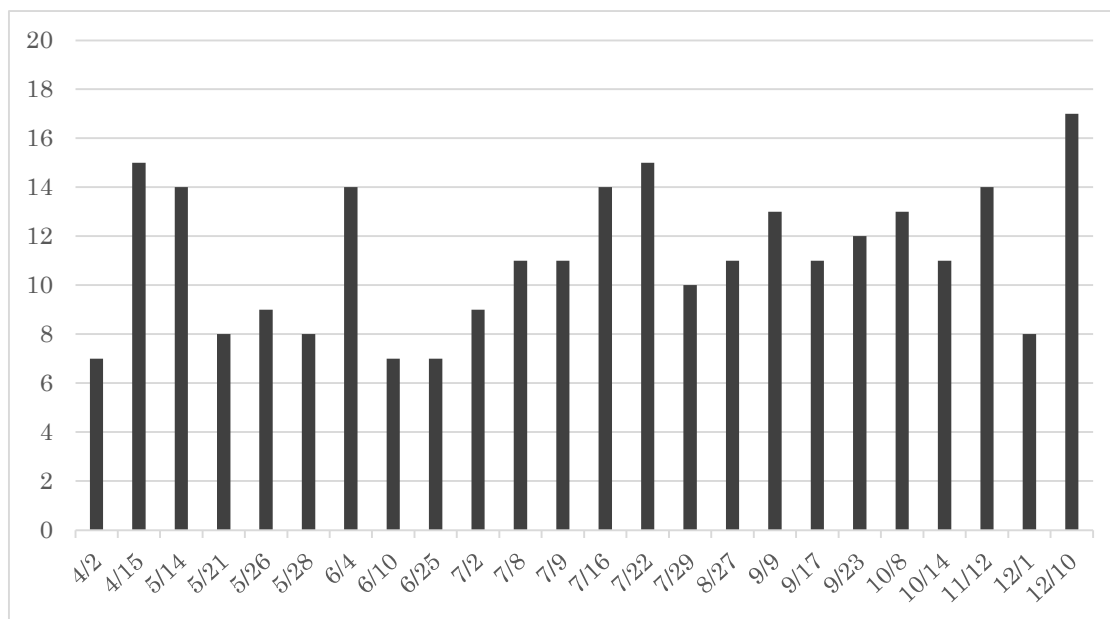


図 4 シラカンバの活動毎の出席人数

(出所) 2023 年度シラカンバの反省会資料より筆者が図を作成

また、森林整備に関わり、自分たちのフィールドを持つことで新たな意識も生まれている。140 年の森という場所は、シラカンバが自主的に手を挙げて森林の整備を行っている場所だ。整備を始めたきっかけを会長である A さんが教えてくれた。きっかけの中には、当別町の森林ボランティアとして、自分たちにできることを生かしたいという思いがあった。

(当別町の 140 周年を記念した) いろんな事業のうちの 1 つとして、全く独自の形ですけれども、森づくりできるのは我々だという意識があったんでね。記念になる場所を作りたいなっていうことで申し込んで、町の方もぜひやってくださいと。町が積極的に場所選びやら面積を確保してくれてね。協力してもらってでき

²⁶ 2023 年 11 月 13 日 J さんへの聞き取りより

た。だから、自分たちのその 1 つのベースを持つと、愛着も出てきますしね。俺らの森だ、みたいな²⁷。

ほとんどが森づくりの初心者だったシラカンバの会員は、これまで活動を積み重ねたことによって、森林ボランティアとしての自覚を持っている。地域の森林整備を行う中で、自分たちの仕事ぶりに対して自信を持つことにつながっている。

しかし一方、会員からは、森林ボランティアとしての活動内容には、物足りなさがあるといった声もある。育樹を中心に行ってきたシラカンバは、これまで除伐や間伐、枝打ちなどの活動は積極的に行われてこなかった。Eさんは、作業内容が草刈りに偏っていることに対して意見を持っている。

やってる内容は、さっき言ったように草刈りが中心みたいな。偏ってるね。もっと枝打ちだとか、いろんな仕事があるわけでしょ。植林は、毎年少しはするけど、まあ少ないよね。もっともっとたくさん木を植えたいね。そういったのはちょっと足りないかな²⁸。

間伐などの作業には、その場に応じて安全に木を倒す技術も必要であり、自分たちの技術力に見合った木がフィールドにあるとも限らない。加えて、切った木の処理や活用の方法まで考えなければならないなど、木を倒すことは容易ではない。森林ボランティアとして携わることのできる活動は、団体としても限界があったといえる。

しかし、2024 年度には外部の団体から依頼を受けて主に 5 つのフィールドで植樹や草刈りの活動を行い、仕事ぶりに対して評価を受けている。Lさんの私有地は、シラカンバの活動地の一つであり、シラカンバは草刈りや散策路の整備を依頼されている。シラカンバが協力することは、所有者からすると整備のための人手を増やすという面で助かっていると Lさんは語った。

（シラカンバは）山と戯れるっていう会ですよ。誰かのボランティアになってんだよね。やってることが。（社会福祉法人）ゆうゆうさんが切り開いてほしい時に手伝ってあげると。10 人も行ったら 10 倍ですからね。1 人だったら 1 人だけど、僕も 13 人来てくれたからさ。13 倍だもんね。13 日間やらなあかんこと 1 日でやってくれたんだから²⁹。

²⁷ 2023 年 9 月 4 日 A さんへの聞き取りより

²⁸ 2023 年 11 月 14 日 E さんへの聞き取りより

²⁹ 2023 年 11 月 19 日 L さんへの聞き取りより

一人で山に入って作業することも可能であるが、10名程度の団体が一緒になって作業することでより効率よく行うことができている。Lさん自身もシラカンバの会員であることから、シラカンバの山で楽しみながら和気あいあいと作業している雰囲気を知っている。そのような雰囲気が中心的である一方で、ボランティア団体としての役割も果たしていると言えるだろう。

また、シラカンバが整備を行う当別町の道民の森神居尻地区にある「Fの森」では、これまで3年間継続して仕事を任されている。「Fの森」はコープさっぽろの「コープ未来の森づくり基金」によって森づくりが行われている場所で、コープさっぽろの組合員を中心とした市民が作業を行ってきた。ここでシラカンバが担っている作業は、コープさっぽろの組合員が植樹をする際のヘルプ業務や下草刈りである。特に重労働であるのは、つぼ刈りと呼ばれる作業だ。これは、鬱蒼と茂った草の中にある小さな苗を探しながら、草刈鎌で苗の周りの草を刈り取る作業であり、物によっては10cmほどの苗を見つけなければならないことに加え、手作業のため腰を曲げながらの作業が続く。この作業を怠ると、その後に行う電動草刈機での草刈りの際に苗を見逃してしまい、せっかく育っていた苗も一緒に刈り取ってしまう危険性がある。そのため、集中力も伴う作業といえる。2024年度のこの作業は、炎天下の中10時半頃から昼食を挟んで14時頃まで作業が続いた³⁰。

草刈りは、以前造園会社に委託したこともあったそうだが、より丁寧に小さな苗を育てていくため、機械を使わない手作業が必要になり、森林ボランティアにお願いすることになった背景がある。Fの森のコーディネートを行うNさんは、「こうやってやってほしいっていうのを伝えて。3年続けてやってもらって実績はあるよね。きれいに（草刈り）やってくれてるよ。機械も使えるし³¹」と語った。つぼ刈りの作業は、シラカンバの他のフィールドでは担当していない作業であったため、最初は作業の要領を掴むのにコミュニケーションが必要だったが、作業を継続していくうちに認めてもらえるようになっている。

加えて、シラカンバのこれまでの活動はさまざまな団体からも評価を受けている。北海道庁をはじめとして、森づくりの継続的な取り組みが評価され、表彰されるに至っている。受賞歴は、表4の通りである。

表4 シラカンバの受賞歴

受賞年	名称	表彰権者
2013年	「ほっかいどう地球温暖化防止貢献の森林づくりコンクール」 ボランティア部門 最優秀賞	北海道 公益社団法人北海道森と緑の会 一般社団法人北海道造林協会
2019年	「北海道社会貢献賞」 (水産業・林業関係功労者)	北海道
2021年	「北海道知事感謝状」	北海道

(出所) シラカンバ HP を参照し、筆者が表を作成

³⁰ 2024年6月23日 参与観察より

³¹ 2024年6月23日 参与観察より

以上、シラカンバは、育樹を中心とした活動に力をいれ、外部団体の要請にも応じながら森林ボランティアとして森林整備に携わってきた。活動内容は、下草刈りが主になっており、会員の中には成木を扱うような作業を求める声も聞かれるが、一方で、森林ボランティアだからこそ時間をかけて丁寧に行うことのできる作業が任せられる面もある。そうした活動を続けていくうちに、会員も自分たちが森林ボランティアとして仕事を受けてきたという自信や自覚が芽生えている。また、森林ボランティアの活動を一つの仕事として、熱心に取り組む意識があった。

2-4 目の前の活動を楽しんだ先のボランティア

本章のこれまでの記述より、シラカンバが継続的に森林整備を行っていることや、子どもたちとの交流が生まれていることなどボランティア団体としての活躍がみられた。しかし、会員個人は必ずしもボランティア活動に参加すること自体に関心があるわけではない。

森づくりに対する思いに関しては、会員の間でも意欲的に発言する人もいれば、関心がない人までさまざまであった。Fさんは、森林を育てるという活動をしながらも、木々が成長する遠い未来のことを想像しながら活動を行っているわけではないと話す。

森づくりであるとか、植樹をして、育てて森が活性化するとかは考えてなかった。（シラカンバに参加する理由は）森に行くのが楽しいからとか、いろんな人と話をするのが楽しいからみたい。（中略）たとえば、22世紀の森を整備とかをしっかりとるんだとか、何年後かのためにするんだとかそういうのも私はないな³²。

森林整備の目標について、シラカンバは作業の目標は立てているものの、将来のことについて話し合われることは少なかった。これにはさまざまな要因が考えられるが、一つは外部団体が持つフィールドで作業を行っているためシラカンバが主体的に計画をすることができない点がある。二つ目に、自分たちのフィールドであっても森づくりについては試行錯誤の途中段階であり、木々は実感できるほど毎年成長するわけではないため、将来といっても果てしなく先のことになってしまい想像がしにくいということもある。そうした中で、Aさんは、会の目標について山に興味や関心を持つことを大切に活動していると話した。

当然、森づくりも大きな目標ですけども、それを通じて、山に関心を持ってそこに貢献できることになればいいなという。だからと言って、何かを残したかとい

³² 2023年11月9日 Fさんへの聞き取りより

うことになる、ちょっと心もとないところはあるんですけどもね。そうじゃなくて、身近な山に興味を持って接するうちゅうような気持ちの人が少しでも増えてくれば、同じ楽しみを味わえるかなって感じがしますね³³。

森や自然の中で楽しむことを一歩目として、会員たちは集まって活動していることがわかる。森での楽しみを中心に活動が考えられているため、森づくりやボランティアに関心がなくとも森林ボランティア活動を楽しむことができ、結果として森林整備や地域社会への貢献が実現できている。

Jさんは、「日本の自然を守るとか、そういう目的はないですよ、残念ながら³⁴」と話した。Jさんは、知り合いに誘われたことを理由に、シラカンバに継続して参加しているという。森林ボランティアへの参加の目的は、環境保全や自然環境のために活動するためではないという。また、同じくEさんは、シラカンバはボランティアを念頭においた活動ではなく、遊びの要素が強い活動だと語った。

うちのボランティアはほとんど人のためになって謳ってないんだ。どっちかといえば。参加してる人たちの遊びみたいなもんだ³⁵。

シラカンバは、任された仕事や森林ボランティアの重要な活動に熱心に取り組む一方で、たとえば山菜の出る時期に合わせて植樹を行うなど、季節ごとに森や自然を楽しめるようにスケジュールを設定することも行っており、活動とともに会員が楽しめるような活動の持ち方が考えられている。その点で、会員の遊びを中心に考えながら、森林ボランティア活動を並行して行っているともいえる。趣味活動の集まりにおける相互作用について研究した大西（2021）は、服飾製作サークルを事例に、趣味活動の集まりには、主目的の活動と気晴らしのための行為が複層的に存在しており、集まりの中で秩序をもって場面が転換されていることを明らかにした。シラカンバに引き付けて考えてみると、シラカンバの森林ボランティアの活動も、活動の中で仕事として捉えられる部分と遊びの部分の複層性があると考えられる。1年間の活動の中には、参加者みんなで楽しむことのできる遊びの要素が盛り込まれているものの、作業中に自由に遊んでいる人や談笑ばかりしている人はいない。仕事と遊びのリズムがはっきりしている活動を保つのは、活動をする上で草刈機を使用する音が響いていることが重要な要素の一つであると考えられる。草刈機の作業音は、周りの話し声が聞こえなくなるほどの音量のため、一人が作業をはじめると他の会員も自然と作業を開始していく。休憩時間になると、少しずつ会員が草刈機を止め、だんだんと音が小さくなり時間に気づいていない人もその音の変化によって作業をやめるよう

³³ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

³⁴ 2023年11月13日 Jさんへの聞き取りより

³⁵ 2023年11月14日 Eさんへの聞き取りより

になる。休憩時間には、会員の間で談笑したり、山菜を採ったりする場面が見られた。周りの作業音によって活動のリズムが生まれ、仕事と遊びが活動の中に共存できるようになっている。

以上、シラカンバは、森林整備や、地域の子どもたちとの交流など森林ボランティアとして多様な活動を行ってきた。その活動の中には、外部の関係者からの提案を受け入れる形で展開されたものもある。会員は、このような森林ボランティアの活動を最初から「誰かのために」といった奉仕の意識を持って行っているというよりも、活動の楽しみを土台として実施してきた。富井（2017）は都市住民が中心となって活動している森林ボランティア団体において、参加者が社会的意義から距離をはかって活動を語っていることを指摘した。しかし、全く社会的意義と切り離して活動を捉えているわけではなく、活動をした結果、森や地域のためになっていることを自覚し、社会とのつながりを認識するに至っている。また、シラカンバの森林ボランティアの活動は、会員から遊びの要素があると認識されていた。しかし、外部から任された仕事などには熱心に取り組む姿があるなど、仕事としての側面もあった。これらの仕事と遊びの複層性を保ちながら、活動が維持されていると考えられる。

3 森林ボランティアが作る居場所

3-1 居場所の構成要素

3-1-1 森林ボランティアを通じてお互いを知る

第2章では、森林ボランティアとして、地域の森林保全の担い手として活躍しながらも、必ずしも林業や森林保全に関心がないことや、ボランティアの意識をもって活動しているわけではないことが明らかになった。そのような状況の中で、シラカンバに参加する人たちは、2-3の図4で示したように会員が常連となって頻繁に活動へ参加している。会員は、なぜ継続して参加することができているのだろうか。本章では、継続的な参加の理由として森林ボランティアが居場所となっていることに着目して分析を行う。居場所とコミュニティの関連は、先行研究でも論じられてきた。とりわけ、湯（2022）が行った地域ボランティアに従事する高齢者のコミュニティの位置づけに関する研究では、高齢者が参加する地域コミュニティの一つとしてボランティア活動を取り上げ、活動に参加することが居場所感を高めていることを示した。本章では、森林ボランティア活動の特徴と居場所の関連性を見出し、居場所の構成要素やその意味について考察する。

聞き取り調査を行った結果、会員から多く聞かれたのはシラカンバの中の人間関係や他メンバーの人柄に関する語りであった。Aさんは、シラカンバが森林ボランティアの活動を行いながらも、共通の楽しみを持った人びとが集まった団体であることを語った。

我々、森林ボランティアという名前になっていますけども、森林を通じて仲間作りっていうのが、本来のそのところかもしれませんね。（中略）やっている内容もそうですけども、一番は人だと思えますね。同じ志っていうと大げさになりますけども、同じ、共通の楽しみっていうか、価値観を持った人たちが集まって、それを表立って言うということじゃなくてですね、人柄って言いますか。そういった人たちと、繋がりを持っていけるっていうのが、一番私としても続けられている要素かなって感じますね³⁶。

これまでに筆者が観察を行った際には、春の季節に行う植樹で、作業をしながら山菜を見つければ収穫をしたり、きのこ採りの話題で盛り上がっている様子が見られた。会員の中には森林づくりに関心を持たない人もいるが、森林や山菜などを含めた自然の中で楽しむことが共通点となっている。

Hさんは「森林だとか木には興味ないから」と言っていたが、活動の中で経験した山菜採りやきのこ採りに楽しみを見出しているという。Hさんは同時に、Eさんの話の面白さにつ

³⁶ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

いて語った。Eさんは山菜やきのこに造詣が深く、他の会員からも頼りにされている声が挙がっていた。Aさんの語りにも通じるように、森林のことだけでなく共通の楽しみがもとになって、会員間のつながりが生まれている。

共通の話のネタがあるから。それだと、Eさん。あの人はもうすごい知識人だから。いろんなこと知っているでしょう。その話を聞き入っちゃう³⁷。

また、活動時の楽しみとして挙げられていたのは、会員同士の会話であった。シラカンバの活動では、作業の前後で会話をする場面がたびたび見られる。活動日の集合時間に近くなると、作業道具を置いている倉庫に会員が続々と集まってくる。その日の作業道具の準備を行いながら、近況を報告しあい、準備や片付けが終われば、自然と一つの輪になって世間話で盛り上がる。作業中は、機械を使うということもあって会話をするのは難しいため、このような隙間の時間が親睦を深める機会になっていた。

会員は当別町内に住む人以外に、札幌や小樽からの参加者がいる。加えて、北海道外からの移住者が7名いることもあり、ボランティア活動を通じて知り合う場合が多い。そのため、作業の前後で交わされる会話が仲を深める重要な点となっている。仕事の定年退職後に当別町に移住してきたFさんは次のように語った。

行きたいと思っている理由はやっぱり話がしたいとか。話が合うかな。同年代の人たちから色々教えてもらったりね。(自分が)北海道の人じゃないからね、いろんな話は全部新鮮³⁸。

会話は、当別町の昔話から最近のニュースまでさまざまである。Fさんの語りにもあるように、会員は同年代が多く集まっている。そのため会話の中で共感が生まれることもたびたび見られる。

Gさんは、作業後に飲食を共にしながら会話をする楽しさを語った。暑い夏の日には長袖長ズボンを身に着け、2、3時間継続して草刈りを行うボランティア活動は、相当の疲労感を伴う。しかし、作業後に親睦を深めることによって、仲間意識を持つことにも繋がっているという。

作業が終わってからだべって。飲んだり、ご飯食べたりするのが22世紀の森だっけ。あそこも、作業した後バーベキューね。あれも楽しい。暑いところ、草刈ってさ。(作業の大変さを)忘れさせるものがあるんだよね。やっぱりしゃべっている人って、人と喋らないと寂しくなるんじゃないのかな。みんなと仲間意識を持って、

³⁷ 2023年11月26日 Hさんへの聞き取りより

³⁸ 2023年11月9日 Fさんへの聞き取りより

こうして語り合うのが 1 番いいと思うけど、同じ行動を起こしてさ。目的を同じくして³⁹。

森林ボランティア活動は、毎回の活動で作業の工程を決め、一日分の達成目標が設定される。たとえば、フィールドをエリアや工程毎に分割し作業日を分けて行うことがある。その日のゴールが明確に決まっているため、会員同士も目的を同じくして作業を行うことがしやすくなっている。結果として、お互いの働きをカバーしあうなど助け合いが生まれている。

以上、本項ではシラカンバの会員間のつながりに注目してきた。森林ボランティアに参加してはじめて知り合う人もいる中で、会員同士の会話や広く森林に関わる共通の楽しみを通じてつながりが生まれていることがわかった。また、森林づくりのために作業を共にし、作業後に仲間と語りあえることが、より一層つながりを深める要因になっている。

3-1-2 自由に過ごせる雰囲気

前項では、シラカンバ会員が継続して参加できる要素の一つとして人間関係を取り上げた。会員の間からは、もう一つの要素としてシラカンバのゆるい雰囲気が続けられる要因であるとの声も聞かれた。E さんは出席率の高い会員の一人であるが、他の会員の出欠については気に留めていない。出欠の強要はかえって悪い影響を及ぼす可能性に言及している。

都合が悪ければ出なくていいし。出れる時だけ出るってことです。この年、2、3 回出るって人もいるよ。ほとんど顔を見たことない人もいる。でも、誰も言わないですよ、それに対して。ボランティアの会ってのはそうでなきゃ持たないと思うけどね。あんまり規則をいっぱい作ったりしたら、なんであいつ出てこないんだろうっていうのあったらね⁴⁰。

加えて、L さんは、シラカンバ以外にも、町内会の役員や町内のサークル活動などに積極的に参加している。シラカンバの活動は多いときで月に 4 回程度あるため、他の活動と両立する必要がある。入会を誘われた際には、町内会や他の趣味などとの両立の難しさを理由に入るのを躊躇っていた。しかし、入会後にシラカンバの雰囲気を知り、気軽に参加できるようになっている。

そんなに行かなくてもいいし、強制もないし、自発的なボランティアクラブだもんね。行きたい時に行くってことです。絶対行かなくてもいいんだ、暇な時に行ったらいいんだとか。そういうゆるゆるやからさ、それはそれでいいんじゃないか

³⁹ 2024 年 7 月 28 日 G さんへの聞き取りより

⁴⁰ 2023 年 11 月 14 日 E さんへの聞き取りより

なと思ったりとか。自分もやることがいっぱいあって⁴¹。

EさんとLさんの語りからは、出席の頻度について問われないという自由さがあるということがわかる。そのようなゆるさがありながらも、毎回の活動では10名前後の参加人数を保っている。シラカンバの会員は21名のため、その半分程度の人数ということになるが、毎回ほとんど常連のメンバーが出席しているような状態である。都合のある時は参加しなくても良いという出席を強制されない雰囲気が、自分自身で出席するかどうかを判断するという環境を作っており、常連メンバーのより自発的な参加に結びついている。

ボランティア活動に自由に参加できるという雰囲気の他に、作業の強制をされないという意味でのゆるさもある。Kさんは活動に参加している中で、自らの意思で作業をするかどうかを決められる自由さを感じている。

制約、要求事項が少ないので居心地がいいのかもしれないですね。都合が悪ければ行かなくてもいいし、炭焼きに行っても、別に火の番しなくても、座ってるだけでも、なんかやれとかってそういう話にもなんないし。それで、やってみたければ、やってもいいしっていうような⁴²。

また、Hさんは、シラカンバの中で年齢が低い方でありながら、20歳以上歳が離れた会員と活動する中でも、作業の自由さを感じているという。特に年齢差を感じさせないような接し方をしてくれる他の会員に対して次のように語っている。

ずっと何年も、一番俺が若かったんだけど、「お前若いんだからあれせえ、これせえ」っていう人もいないし。みんな俺と立場上、同等に話をしてくれたり。逆によくしてくれてるからね。だから居心地もいいよね⁴³。

KさんとHさんの語りから、シラカンバには厳しい上下関係や、年齢の差を感じさせるような雰囲気がないことがわかる。その雰囲気によって、自分のやりたい作業を行うことができ、若いからといって重労働を強いられることはない。加えて、年齢に関係なく、作業をする上でよりよい方法があれば、自由に意見できるような関係性が構築されている。

定例活動を観察し、このような雰囲気は年齢や体の調子に合わせて無理なく参加できることに繋がっていることが伺えた。主な活動である草刈りの作業になると、会員はエンジン式の草刈機を背負って刈るのが通常の流れである。しかし、足腰の調子が悪い会員は、周りの会員と同じ動きをすることは難しい。そのため草刈機は使わず、自分のペースで行うこと

⁴¹ 2023年11月19日 Lさんへの聞き取りより

⁴² 2023年11月23日 Kさんへの聞き取りより

⁴³ 2023年11月26日 Hさんへの聞き取りより

のできる植樹作業に専念している様子があった。シラカンバであれば、自由な雰囲気のおかげで、体調と相談しながら自分が活動できそうな日を選んで参加することがしやすい環境にある。

また、参与観察から、草刈りの際のシラカンバの作業スタイルは、個人が自由に移動しながら行われていることに特徴があるとみられる。この特徴によって、個人の作業のスピードや質がお互いに認識しにくいいため、会員の間で技量に差があったとしても、精神的な負担を感じずに作業ができる。シラカンバの会員は、作業開始から一斉に草刈機を起動させ、自分の刈りたい場所を自由に進んでいく。フィールドの中で、一人ずつのノルマや区分けが決まっているわけではない。そのため、人によってどのように草原を進んでいくのかがそれぞれに任されており、先へとどんどん進む人もいれば、他の会員が刈り残したところを処理している人もいる。その場に居ても、誰がどこを刈ったのか見て判断することはできない。会員がそれぞれ行った作業の範囲があいまいであることで、フィールド内のいろいろな場所を行き来しながら作業が行われており、無意識な場合も含め、お互いの作業範囲をカバーし合いながら活動ができている。高齢者の居場所について研究した後藤（2023）は、高齢者の老化に伴って、今までにできていたことができなくなった時に羞恥⁴⁴の感情が表出し、自ら交流の場を避け孤立を深めていくことがあると指摘する。たとえば、自治会での手芸活動において、自分の作品と同年代の人の作品を比べて劣っていると感じた時に、恥ずかしくなってしまう集まりに通うことができなくなったケースが示されていた。シラカンバの会員の間でも、長年活動を共にしていることもあって、顔を合わせた時にお互いに老いを感じることもあるという。しかし、作業の成果はシラカンバ全体で取り組んでいるものであり、個人の成果について問われることはなく、また、シラカンバの作業の特徴によって個人の作業の範囲があいまいであり、他人の作業と比べることができない。この特徴は、意図されたものではないが、会員が歳を重ねたとしても、作業の質などに自信をなくすことなく参加し続けられていると考えられる。

これまでの会員の語りから、シラカンバの持つゆるい雰囲気は会員の自由な参加を促していることが分かった。安全面を担保するためのルールはあるが、それ以外の参加の頻度やどんな作業をするかは自分で決めることができる。このような雰囲気は、自分のやりたいことやできることを達成できる場所を会員に提供しているといえる。また、活動中のノルマがないという特徴もあって、作業のスピードや質を問われることがなく、精神的な負担を感じずに作業を行うことができていると考えられる。これらを含めた自由に過ごせる雰囲気が、会員にとって参加しやすい環境を作っていると思われる。

⁴⁴ 後藤（2023）は、Giddens（2005）の「ある場面で自分の存在や動機が不適當なのではないかと感じる不安」という羞恥の定義を用いて論じている。

3-1-3 役割を任う

シラカンバでは、ボランティアの組織運営のため会長や広報などの役職がある。役割を担うということは、団体や個人にとってどのような影響があるのだろうか。

病気をしてから、普段の活動になかなか出てこれないGさんであるが、会計や広報の役割を任されている立場としてシラカンバとつながり続けている。作業はできなくとも、活動風景の写真を撮影したり、総会で会計報告をするなど自身も活動に参加しながら組織運営を支えている。Gさんは広報の仕事について、頭を使うことに楽しさを感じており、生きがいの一つにもなっていると語った。

Fさんにホームページ作るのに写真提供お願いするんだけどさ、広報作ったり、ホームページ作ったりするの、これまたね、生きがいの一つになってるのね。やるのがさ、頭使うでしょ。文章考えたりとか、広報のレイアウトやったら、結構頭使うからさ、あれ楽しいしさ。やっぱしね、頭使わなきゃダメだわ。本読むのもいいけど、自分でなんか考えて文字化するとか、映像化するとか、その方がいいよね⁴⁵。

現在3代目の会長に任命されているAさんは、会の設立から携わり、2011年より会長職を続けている。会長の後任を考えていかなければならない歳であると語りながらも、周りから会長を任されることについて嬉しそうに話してくれた。

ちょうど今回で、87歳になりましたんでね。もう前からも、総会の時に話してるんですけど、若い人にな変わってもらおうと。そうしたら、「何にもしなくていいから死ぬまでやれ」って言うんです⁴⁶。

Aさんは、妻を亡くしてから活動に参加できない時期もあったというが、ボランティア活動に復帰する中で気力を取り戻していった。「ボランティアに参加して逆に自分が助けられている」とも語った。また、足の痛みがあり、人工関節の手術を受けたこともあって、他の会員と同じように活動するのは難しい。しかし、周りから「他の人でやっておくから、何もしなくていい」と言われつつも、活動の前後には会長からの挨拶として会員全体に声をかけ、外部との折衝が必要な場合にも対応している。GさんとAさんは共に体の不調を抱えながらも、シラカンバにかかわり続けている。これまでに構築してきたコミュニティや役割があったからこそ、孤立せず社会とのつながりを維持することができていると考えられる。

また、会の中で明確に決まった役職の他に、それぞれの得意分野の作業の際には先頭に立って他の会員を引っ張るといった場面も見られる。Eさんは作業中の雰囲気について次のよ

⁴⁵ 2024年7月28日 Gさんへの聞き取りより

⁴⁶ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

うに語った。

大体こういう仕事は、この人が中心になってるっていうのはあるからね。だから、その人がこうしたらどうなのって言うと、大体それに従うケースが多い。そうだねってなるよ。(中略)たとえば B さんであればね、炭焼きの音頭を取り合ったり。中心になってやるから。だから俺もなんか言ったら、「いや、B さんの言うこと聞いてやれ」ってなるんだ。親方の言うこと聞くんだ⁴⁷。

筆者が炭焼きを観察する中でも、炭焼きの窯を作る際に B さんが先頭に立って作業を行う様子が見られた。窯の土台の作り方などは、基本的な資材の置き方は決まっているものの、会員間でさまざまな工夫や作り方に対する意見が出てきていた。作り方の方向性が決まらない状況で、会の設立当初から活動に参加し、炭焼きの経験も多い B さんが他の会員に指示を出し完成させた。これまでの活動の積み重ねによって、相手の得意分野を認識することができおり、得意な会員に役割を任せることで活動の円滑な進行につながっている。

また、活動を行う中で、他の会員を引っ張っている場面の多い H さんは、「(自分を)信頼してくれてんのかなと思う⁴⁸」と言い、役割を自分に任せてもらえることで周りから認められている実感が生まれている。これらのことから、会員同士で、任せてもらえているという自信と、この人になら任せられるというような信頼関係が生まれている。

ボランティア団体運営のための役割とは違い、作業上でのリーダーシップを発揮する場面はそれぞれの得意分野や経験によって任されている。作業中には、他の会員の前に出て引っ張っていく様子が見られるが、今後のシラカンバの運営について聞いたところ、会長職を自らやりたいと話す人はいなかった。作業をする際には、決められた役職によって会が動いているのではなく、場面によって役割を担っていく流動的な部分があるように思えた。最初からこのような役割があったわけではなく、活動を重ねる中でお互いに知り、その人に付いていく雰囲気ができている。会員間のお互いの印象を聞いた際にも、ほとんどの人がそれぞれの会員の特徴について同じような認識を持っていた。場面毎に決めていくことは、作業が一時止まってしまう状況を引き起こす一方で、毎回意見を交わしながら進めていくことができ、その場の人たちが自ら主体的に参加できる余地がある。

以上、シラカンバの一員として活動に参加することで、ボランティア団体運営のための役割の有無にかかわらず、誰もが役割を担うことができる環境があった。また、活動中のその場の状況に合わせて役割を担うことが見られた。このように流動的にお互いが役割を担うことは、会員同士の信頼関係の構築にもつながっている。

⁴⁷ 2023 年 11 月 14 日 E さんへの聞き取りより

⁴⁸ 2023 年 11 月 26 日 H さんへの聞き取りより

3-1-4 森の空間が交流を生む

シラカンバの会員は、ボランティア活動の中で会員同士の会話や作業を楽しんでいる様子が見られる。森林で活動することは、会員の居心地の良さに関わるのだろうか。本項では、森林ボランティアの活動する空間や環境が会員同士の交流に寄与していることに着目したい。

Gさんは都会と森の環境を対比させながら、森の気持ちよさについて語っている。開放的になる環境が森にはあるということがわかる。

（森に）入ると気持ちいいじゃん。都会のあなたみたいに都会のコンクリートジャングルにいるよりはさ、こういうところへ行けたらば一っとなるでしょう。なんでもペラペラしゃべりたくなっちゃう⁴⁹。

室内などで行う活動とは違い、森林で活動するからこそ非日常的な環境に身を置くことができる。会員に好きな活動について問うた際に、多くの人が炭焼きの楽しさについて語った。炭焼きは、年に一度シラカンバの会員宅で行っている恒例行事の一つである。畑に炭窯を作り、間伐材から地域のバザーで売るための炭を作っている。窯に火をつけて、その日は窯の周りで火の番をしながらキャンプをして過ごす。いつもは作業の間にしか交流ができないが、一晩過ごすことでプライベートなこともゆっくり話すことができるのが人気の理由だ。炭焼きは木が生い茂った場所で行うわけではないが、明かりもほとんどないような自然の中で長い時間を過ごすことができる。普段活動している森林の中も含めて、開放的な場所で過ごすことで、会員間の交流にも役立っている。

C1さんは、森林に入った際にその風景や森の恵みから季節を感じることができるという点を挙げていた。毎年の季節の違いを感じていることが、繰り返しシラカンバの活動に参加する理由の一つになっているという。

外に行ったら、たとえば森の恵みがもらえる時期があったりだとか、やっぱり自然を感じるだとか、季節感はあるね。今年は（きのこや山菜が）取れなかったけど、絶対来年は取るって言って、毎回参加することに。だから、行ったらなんか面白いものがあるかなとか、そういう感じが（ある）。やっぱり四季を感じるってことは、すごく大切なことだと（思う）⁵⁰。

森林をはじめとして、自然の様子は季節や年によって大きく異なる。その時の自然の様子がどのようにになっているかは、自分で現場に行かなければ感じることはできない。毎年、同

⁴⁹ 2024年7月28日 Gさんへの聞き取りより

⁵⁰ 2023年11月15日 C1さんへの聞き取りより

じフィールドに継続して通う森林ボランティアだからこそ、様子の変化に気づくことができる。参与観察を行った際にも、次のような会話が繰り返されていた⁵¹。

H さん「去年、あっちの方に大きいきのこあったんだよね」

J さん「今年はどうなの？」

K さん「今年はぜんぜんだめですよ」

このように例年の様子と比べながら、その年の自然の恵みを楽しむといった様子がよく見られる。単に、季節を楽しむだけでなく、会員同士で共有できることもシラカンバに入っていることで可能になっている。このやりとりは、会員が継続的に参加しているからこそ行うことができている側面もある。また、森林で活動しているからこそ、共通の話題が生まれたり、同じものを見て楽しさを共有することができる点で、森林ボランティアの特徴が居場所の構築に役立っているとの見方ができるだろう。

3-2 居場所の機能

3-2-1 自然とかかわり続けられる場所

会員の中には、居心地の良さを理由に森林ボランティアに参加している人がいた。会員にとって居心地の良い場所はなぜ求められるのだろうか。会員の若い頃の生活を聞く中で共通点が見えてきた。その一つに、山で遊んだ経験や思い出がある。

K さんは、幼い頃に里山が自身の生活と身近であったことを語った。炭焼きの際に遊んでいた経験は、現在のシラカンバの活動とも共通する。

原風景としてすり込みみたいな、幼児期からのもんだから。燃料がまだ 5、6 歳の頃は山に依存してたから、炭焼きとかにね、小学校に上がる前は連れてってもらったりして、一緒に遊んでたことあるんですよ⁵²。

その後、K さんが小学校に上がった頃には炭を焼かなくなったそうで、大学に進学してからは里山とのかかわりも途切れてしまった。しかし、そのような経験があったため、社会人になって森林インストラクターの資格を取るなど、森林や里山にかかわりたいという意識がずっとあったという。「森とか山林に関わることで、そこに居所があるって、それだけでいい。今のところそれで満足してる⁵³」といい、活動場所にこだわりがあったことがわかる。

⁵¹ 2024 年 11 月 2 日 参与観察より

⁵² 2023 年 11 月 23 日 K さんへの聞き取りより

⁵³ 2023 年 11 月 23 日 K さんへの聞き取りより

Aさんは、幼い頃から、仲間で集まって森で遊んでいた経験があった。その経験をシラカンバと重ねながら話してくれた。楽しかった思い出の続きとして、シラカンバでの活動がつながっているという。

森に入っているいろんなこと仕事するっていうのは、初めての作業ではなかったんですね。子供の頃から山でやってましたんでね。それこそ、のこぎり持ってなんかしてやってましたんで、なんか思い出したっていうか、続きみたいな感じで入ったのがきっかけです。森で遊ぶ楽しさっていうのは、やっぱり忘れられなかったもんですから、それを仲間と一緒にできるということはいいことだなって考えてね⁵⁴。

KさんとAさんは幼少期の里山での遊びの経験から、大人になった今も自然の中での活動を求めてシラカンバに参加している。仲間と共に遊ぶことや炭焼きでの楽しさは忘れない思い出として記憶されており、成長に伴って一度は途切れてしまった里山との関係性も、シラカンバに入ることによって再び取り戻している。

Eさんは、若い頃に国内外の山を登っていた経験があり、森林ボランティア活動については「性に合ってるね。やっぱり山登りしたからでないかと思う」と山登りとのつながりを語った。しかし、山登りも年齢とともに頻度が減り、山登りを一緒にしていた仲間とも離れてしまったとも話した。

僕の場合は、退職してからシラカンバ以外ないからね、他に。山登りも時々やるけども、それは70歳過ぎたらなかなか山登りはしなくなるし。だから、退職しても70歳ぐらいまでの間は友達と山に登ったりもしたけど。友達も結構離れた場所になっちゃってるから。それもあるし、お互い歳を取ってるし⁵⁵。

シラカンバで集まって森に入ることは、自然と触れ合うという点で山登りと共通する部分もある。シラカンバ以外の交流が少ないという状況の中で、これまでの趣味に近い形で楽しみを持ち続けることができている。

C2さんは、一般客用に整備されたゲレンデではなく、整備されていない場所を滑る山スキーをしていた経験がある。山スキーをしている間に山や木に興味を持つようになったと語った。

同じスキーでもね、歩いてるから、山を見ることになるでしょ。木を見ることになるでしょ。スキー場ではないからさ、本当に山のどこも道もない所を登ってくんだから、そこに行って「あー山いいな」とかって（思って）。それがきっかけじゃな

⁵⁴ 2023年9月4日 Aさんへの聞き取りより

⁵⁵ 2023年11月14日 Eさんへの聞き取りより

いかと思うんだよね⁵⁶。

C2さんのように、山や木に興味を持ったことによって、山に入りたいという感情が生まれた人も多い。また、C1さんは、森林ボランティアに入ることによって、山で遊ぶ方法をたくさん知ることができたとも語っていた⁵⁷。仲間たちと自然の中で遊ぶことが可能になっていることとともに、会員のこれまでの経験が共有され、知識や楽しみの幅が広がっている。

以上、山や自然の中で遊んだ経験は、良い思い出として会員の中に記憶されている。シラカンバの活動は若い頃の思い出の延長線上にあるとも考えられる。年齢や環境が変わり、一度山や森とのかかわりが途切れたとしても、仲間と自然の中で遊ぶことができる場所としてシラカンバは存在している。この点について、森林ボランティア活動だからこそ、会員が参加を継続したいと思うことができる理由にもなっている。

3-2-2 仲間ができる場所

シラカンバの持つ居場所はあるのままで自分でボランティア活動を楽しめる環境を与えており、会員同士のつながりを生んでいる。このような環境は、会員の生活にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

シラカンバに所属することは、移住者が地域の中でのつながりを作ることができる側面もある。シラカンバには北海道外からの移住者が7名いる。Gさんもその一人であり、当別町の人と親しくなるきっかけを増やす一つ的手段としてボランティア活動に参加することを選んだ。

定年退職した63歳の時、毎日が日曜日でね、いいなと思ったけど、1ヶ月もたなかったね。何もすることないんだもん。友達もいないし、会社の人みんな離れちゃってるしさ。やっぱりこれからは離れたから当別町の人と親しくならないといけないと思って、そのためにはまずボランティアに行って顔出した方がいいのかなって⁵⁸。

Gさんは複数のボランティア団体に参加しているが、その中でもシラカンバは「仲間意識ucciゅうか、飽きがこない」と評価している。個々の活動を行うボランティアとは違い、森林ボランティアは仲間と一緒に活動することが基本であるため、お互いに深く知り合うことができる。そのため、シラカンバを通して地域の人と交流するという目的が達成されている。また、そのつながりが派生し、シラカンバの活動日以外にも交流が生まれている。Fさ

⁵⁶ 2023年11月15日 C2さんへの聞き取りより

⁵⁷ 2023年11月15日 C1さんへの聞き取りより

⁵⁸ 2024年7月28日 Gさんへの聞き取りより

んは用事の合間に G さんの家の近所を通る際に寄ってお話をすることもあるそうだ。

個人的に会うのは G さんぐらい。時々、さっきの（スウェーデン）ヒルズの家に行ってちょっと遊びに行って、1 時間ぐらい話した。仕事の時も仕事の途中で寄ったり⁵⁹。

G さんと F さんは移住者同士であり、シラカンバに参加してから知り合った。当別町に移住してきて、これまでの人間関係から離れている中で F さんは「シラカンバが人間関係の 8 割かな」とも表現している。2 人とも定年退職後に移住をしているため、人間関係を構築するきっかけを見つけるのは簡単なことではない。G さんは「こういう集まりってさ、まず仕事辞めるとないから。隣近所仲良くすればいいんじゃないかって言ってもなかなかそうもいかないもんね」と言い、同じ町内会や近所だけではないつながりを求めていることがわかる。

加えて、シラカンバは仕事や家庭以外の居場所としての役割もある。H さんは、会社の人間関係に嫌気がさしたことから、環境を変化させるためにシラカンバに通い始めたという。結果として、シラカンバをはじめ関係団体などのさまざまな人と交流ができることに楽しさを感じている。

会社行くのが嫌で嫌で。そんな時にそういう（近所のシラカンバ会員の）様子を見て。自暴自棄になっちゃったような時期だったから、気分転換っちゃうか。それで、ちょっとやってみようかなって⁶⁰。

H さんは、森林に興味があるわけではなく、体を動かせる作業を求めてシラカンバに入ったが、入会してからさまざまな人と知り合い、山菜やきのこ採りを教えてもらったことにより興味を持つようになったという。きのこの種類などは主に E さんに教えてもらったと言いい、H さんは E さんを「先生」と呼ぶ。E さんは H さんを誘って、活動日以外に山菜採りへ一緒に出かけることがあるという。

最初は生活の環境を変えるための目的で入った H さんも、活動に参加し山菜採りの知識を得て、新たな趣味を見つけるに至っている。また、E さんは現在、他のボランティアや町内会の活動に参加しているわけではなく、友人関係はシラカンバのつながりが中心になっているという。シラカンバを介して関係性が構築され、趣味を一緒に楽しめる仲間をお互いに見つけることができている。

以上、シラカンバの活動を通して、新たに地域の中での仲間を作ることが可能になっている。森林ボランティアにある居場所は、家族、職場、近所づきあいなどとは異なる意

⁵⁹ 2023 年 11 月 9 日 F さんへの聞き取りより

⁶⁰ 2023 年 11 月 26 日 H さんへの聞き取りより

味を持った集まりであることがわかった。森林ボランティアの特徴である会員がともに同じ作業を行うという点が、交流を促すことにつながっている。また、はじめはお互いを知らない状態であっても、自然の中で活動することで、山菜採りなどの趣味を介して知り合うことが可能になっている。

3-3 「社会的居場所」と森林ボランティア

第3章では、シラカンバの活動が会員の居場所になっていることに着目し、森林ボランティアのどのような活動が、居場所を作っているのかを明らかにしてきた。森林ボランティア活動に参加することによって、会員同士のかかわりが生まれ、共通の興味や目的を通して楽しむことのできる場所が構築されている。

また、シラカンバのコミュニティは「社会的居場所」の議論とも通ずると考えられる。「社会的居場所」とは抽象的な概念ではあるが、居場所の中でも、他者とのかかわりや役割を持つ場所として考えられている（上野ほか,2018）。また、石本（2010）は心理学の視点から調査を行い、「社会的居場所」と一人でいるときの居場所である「個人的居場所」を区別した上で、「社会的居場所」はありのままでいられるという感覚や、自分が役に立っていると思える感覚と関連していることを指摘した。ここでは、「社会的居場所」の他者とのかかわりと、役割を持つ場所という要素をシラカンバのコミュニティを合わせて考えてみたい。

他者とのかかわりということに関しては、これまでに見てきたように、共に作業を行うことで参加している会員間での会話が生まれており、顔なじみの関係性ができている。会員の参加の背景はさまざまであるが、定年退職後や北海道外から移住をしてきたことにより、人間関係が希薄になっていたところにシラカンバでの居場所があることが助けになっている。シラカンバの活動日での交流のみならず、プライベートでの交流も生まれている。仕事や家庭以外の関係性が生まれ、共に楽しみを共有できる仲間づくりにもつながっている。また、活動場所が森林の中であるという特徴もあって、植物や季節に関する話題が生まれやすくなったり、開放的な気分で他人と接することができたりと、活動する環境が他者との交流にも影響を及ぼしていることが考えられる。

次に、シラカンバに参加する際の役割について注目する。シラカンバの組織運営のための役職についている会員は、役職の仕事を行うことによって楽しみや生きがいを感じていた。また、体の調子によって、他の会員と同じように作業を行うことができない場合にも、役職が与えられていることによって、自分が会のために役に立っていると感じることができるという点で、会の中の役職は重要な要素であった。加えて、決まった役職には就いていなくとも、作業を行う中で発揮されるリーダーシップが、会員同士の信頼関係につながっていることが明らかになった。

近年では、居場所づくりの観点から、高齢者がいきいきと活動できるコミュニティを形成

する場所として、ボランティアやコミュニティカフェ⁶¹が行政や NPO などによって運営されていることがある。こうした事業は、高齢者の社会的孤立の課題に対する予防策として実施されることが多く、会員間の交流がしやすいような空間づくりやイベントの企画など、運営者の工夫や仕掛けによって交流が促されている。後藤（2023）はまた、物理的な場所があれば必ず居場所になるわけではなく、高齢者の身体的・精神的・社会的機能の衰えへの不安に対して「自分らしさ」を形づくることのできる場所が必要であると主張する。シラカンバは、外部の運営者がいるわけではないため、活動の中で交流を促すような仕掛けや工夫などはない。会員たちは、森林ボランティアの活動で自然と生まれた交流の中で、自分らしく活動できる場所を見つけることができている。シラカンバの会員たちにとって、活動の自由さは重要視されており、活動への参加のしやすさや居場所が構築される上で欠かせない要素であると考えられる。そのため、シラカンバの場合には、交流や活動のスタイルが強要される環境ではなく、会員たち自身で活動を展開する中で構築された居場所の形が、より会員にとってなじみやすかったと考えられる。

シラカンバの活動が作る居場所は、団体の設立当初から会員間の交流や居場所づくりを企図して形成されたものではなく、活動を重ねるうちに会員間のつながりという側面が強くなったことで、結果として会員がシラカンバを居場所として感じるができているという点で特徴がある。また、居場所の中でも、他者との交流の中で生まれる「社会的居場所」として捉えることができ、交流だけでなく、信頼関係や顔なじみの仲間、役割を与えられることによる生きがいなどを得ることができている。

⁶¹ 倉持（2014）はコミュニティカフェを、「飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所」と定義している。

4 森林ボランティアにとっての高齢化・固定化

4-1 会員の生活環境と森林ボランティアに所属すること

森林ボランティアがかかえる高齢化・固定化の問題は、どのように捉えることができるだろうか。近年、森林ボランティアは、会員の高齢化や固定化の課題を抱えている。森林ボランティアの団体を対象にアンケートを行った調査では、1,624 団体のうち 965 団体が、会員・参加者の確保に苦勞していると回答していた（森づくりフォーラム, 2019）。加えて、アンケートの自由記述の欄には、団体の課題として「会員の高齢化」が挙げられていた。これまでの先行研究では、高齢化が進むことによって活動できる人員が減り、緑地管理の人力不足が起こること（渡辺ほか, 2015）が指摘されている。また、会員の固定化については、ボランティア組織の継承が困難になることが事例研究より明らかにされている（小野, 2013）。これらの指摘は、ボランティア組織の継続を目指す視点で論じられることが多かった。しかし、高齢化や固定化が組織や会員にどのような状態をもたらすのかは、具体的に明らかにされているわけではない。そこで、第 4 章では、高齢化や固定化は、森林ボランティアにどのような影響を及ぼすのか、そして、森林ボランティア団体は高齢化や固定化にどのように適応しながら活動を続けているのかを明らかにすることを目的としたい。

シラカンバは、会員のほとんどが 65 歳以上であることや、会に所属して 10 年以上が経過している人が多いことを踏まえれば、高齢化や固定化が見られる森林ボランティア団体と言えるだろう。森林ボランティアの団体として高齢化・固定化を考えるならば、今後の活動の量や内容に影響を及ぼす可能性がある。会員の中には、以前よりも体を思うように動かすことができなくなり、自分に参加できそうな活動日や作業を選んで参加するようになっている人もいる。そのため、現在と同じような作業量を維持し続けるためには、新入会員の加入が必要になるかもしれない。森林ボランティアの団体の社会的意義を考えると、高齢化の問題を避けて考えることはできないだろう。

しかし、高齢化と言っても、高齢化の能力や健康状態などは多様であり、一概に高齢化が問題であると主張することは難しいのではないだろうか。高齢者の社会参画についての研究を行った野口（2017）は、組織論の視点から、高齢者による組織運営をする際の分析の視角を提示した（表 5）。高齢者が社会参加を行う場が、ボランティアを含めさまざまある中で、それらの活動や働き方をどのように分類できるかを示したものである。①高齢者ができることをする、②高齢者しかできないことがある、③高齢者もしなくてはならない、という 3 つに分類されており、キャリアや生活環境が多様な高齢者が活躍しやすい組織運営が模索されたものである。これら 3 つの視点をシラカンバの活動に合わせて分析してみたい。

表 5 高齢者の社会参加における分析視座

① 高齢者ができることをする	アクティブ・エイジング等、社会参画の視点
② 高齢者しかできないことがある	ネガティブ：他労働者に敬遠されることを行う。 ポジティブ：特筆すべき能力がある。
③ 高齢者もしなくてはならない	プロダクティブ・エイジング ⁶² 等、社会的な資源として組織する。

(出所) 野口 (2017) の表を参照し、筆者が作成した。

①高齢者ができることをするという点では、高齢者の社会参加やアクティブ・エイジングが重視される。WHO (2007) によるとアクティブ・エイジングとは「人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会を最適化するプロセスである」と定義づけられている。シラカンバに参加している会員の視点に立つと、むしろ歳を重ねるごとに森林ボランティアに参加することの意味の重みが増している。シラカンバは、設立から 19 年が経ち、所属する会員も同じように歳を重ねてきた。それとともに会員個人を取り巻く生活環境も変化していた。大川 (2003) は、老年期は、高齢になるほど身体機能や社会的地位、人間関係を失うことを経験し、居場所を喪失する時期であると表現した。この指摘と同じく、シラカンバの会員も、歳を重ねるごとに、体調面での不安が増えたり、家族や友人を失うことを経験したりしてきた。多くの会員が定年退職を迎え、職場でできた人間関係が希薄になっていた。また、年齢を重ねたことにより、友人と頻繁に会うことが叶わなくなったり、これまでに続けていた趣味も体力の低下などにより止めざるを得ないなどの状況にある。加えて、老後を暮らす土地として北海道外から当別町への移住を選んだ人にとっては、これまでの人間関係からは物理的に距離が離れ、当別町内での新たな人間関係を作る必要があった。そうした人たちにとって、シラカンバという森林ボランティアの活動は、楽しみを介した人間関係づくりの場所にもなっている。森林ボランティアを通して、お互いに趣味やこれまでの経験の共通点を見出し、同年代の仲間を作ることにつながっている。また、仲間ができることで、生活環境が変化したとしても孤立せずに社会関係を維持することができている。

その他に、社会参画という点で、森林ボランティアの活動や、シラカンバのコミュニティは、会員の生活にとってよい影響を及ぼしている。仕事とは異なり、「ボランティア」の活動であることが、自由な参加を促し、誰にとっても参加できる環境にしている。シラカンバの森林ボランティア活動は、依頼された仕事を遂行しなければならない場面はありつつも、個人に課された仕事があるわけではなく、自由に参加することができる。自由という中には、

⁶² 高齢者の老いを肯定的に捉え、「高齢者の持っている広い意味での潜在的な（賃労働や物財の生産だけを意味しない）「生産性」をもっと社会に活用する」という発想のこと (Butler, 1985)

自身の予定や体調に合わせて参加することができるという点と、活動に参加した際に自分がやりたい作業を選べるという裁量の面がある。思うように体を動かすことができなかった会員にとっては、自分にできる作業の範囲を考えながら参加することができるため、気負わなくてもよい環境がある。ボランティアの活動の予定があることは、外出のきっかけになり、人と触れ合う機会にもなる。自由に過ごせる雰囲気をもっていることが、毎回の活動に参加しやすい環境を作り、まとまった出席人数を維持しながら活動を継続できている。

②高齢者しかできないことがあるという点では、これまでの長い人生経験や森林ボランティアでの知識の蓄積によって、シラカンバが地域に貢献できていることが挙げられる。たとえば、地域の子どもたちと交流する際に、シラカンバの会員は、地元のおじいちゃんたちとして森での遊び方の知識を教えている。焚き木の仕方や工具の使い方など、子どもたちとの交流の中で共有される知識は多岐にわたる。それらの知識は、森林ボランティア活動の実践で培われてきたものや、登山経験や幼少期に里山で遊んでいた経験など会員たちのこれまでの生活から得られたものが生かされていた。生きてきた時代によって、幼少期の遊び方や経験は異なり、高齢者だからこそ提供できる知識もある。こうした知識や経験は、イベントを通して地域の子どもたちに伝達されており、自然環境と触れ合うという面での森林教育にもなっている。

③高齢者もしなくてはならないという点では、当別町の森林ボランティアは限られており、育樹を行う仕事もまた担い手が少ないことを考えると、高齢化が進んでも森林ボランティアとしての仕事を続けなければならないという見方もできる。一方で、老年期を迎え、遊ぶ仲間や機会を失っている人にとっては、森林ボランティアに参加することで仲間を得ることができ、さらに、森林ボランティアとして仕事を任されることを通して、自分たちの行った作業が評価を受けたり、認めてもらうことができているという点で、会員にとっても仕事があることが良い影響になっている。シラカンバには自由な雰囲気があるものの、任された仕事には、熱心に取り組む姿勢が見られた。定年退職を迎え、仕事をしていない人にとっては、仕事をこなすことで達成感や充実感を感じることができる貴重な機会になっていると考えられる。

以上、シラカンバにおける高齢化は、会員の体力面や、活動の広がりを考える上で懸念を与えていることは否定できないが、一方で、高齢者だからこそ活躍できる場が広がっているとも言える。高齢者といっても、健康状態や生活環境など、多様な高齢者が存在しており、必ずしも年齢によって活動に影響を及ぼしているわけではない。また、シラカンバは、森林ボランティアとして、高齢者が生きがいを持って老いを迎えられる場所を提供している側面もある。森林の中で活動できる特徴があることが、会員の生きがいや楽しみを重視しながら高齢者の社会参加を可能にしているといえる。

4-2 いつもの仲間と活動すること

一方、森林ボランティアにとっての固定化は、組織や会員にどのような影響を及ぼすものなのだろうか。森林ボランティアの先行研究でも、会員の固定化が指摘されてきたが、具体的にどのような現状をもたらしているのかは明らかでない。また、小野（2013）は、会員の固定化の要因の一つとして、メンバー間で相互に鑑賞し合いたいという動機付けが行われてしまうことや、内向きのつながりが強化されることによって、お互いが唯一無二の存在になってしまうことを挙げた。これを、小野は「相互鑑賞欲求」という言葉で表現した。「相互鑑賞欲求」が高まることで、新たなメンバーを獲得する際に障壁があることが指摘されている。しかし、シラカンバに照らして考えてみると、固定化は会員にとって居心地の良い場所を作り出し、会員の継続的な参加を可能にしていると考えられる。そこで本節では、固定化とは、森林ボランティアにとってどのようなものであるかを考えてみたい。

シラカンバにとって、固定化の影響と考えられることの一つに、シラカンバ単独での活動の展開が難しくなっていることがある。シラカンバは、体力を消耗する森林整備の活動の他に、地域の子どもたちと交流を行う活動を徐々に増やしつつある。これは、これまでのシラカンバの活動と異なる活動の趣旨を持ったものである。この活動拡大の流れは、今後の会員の体力や活動量が低下する可能性を考慮して、シラカンバとしての活動を維持するためのものでもある。「シラカンバだけでは子どもを集めたり、イベントを立ち上げることはできない⁶³」ため、社会福祉法人ゆうゆうの活動に乗る形で活動を広げてきた。シラカンバの中には、そうしたイベントを運営した経験のある人やノウハウは蓄積されていない。今回の社会福祉法人ゆうゆうとのかかわりは、会長である A さんとの縁があって実現したものである。その他につながりを広げていくとなると、会員も限られているため、A さんのようなキーパーソンの存在に頼ってしまうことになる。シラカンバが、今後新たな方向に活動を展開するには、異なる考え方を持つ人との接点や、周りを巻き込みながら引っ張っていくことのできる人の存在が必要になるかもしれない。

一方で、固定化の特徴である顔なじみの会員の出席率の高さによって、シラカンバでは仲間意識や会員間の結束が強い様子が見られた。毎回の活動で繰り返し顔を合わせることは、お互いの人となりを知ることにつながっている。活動の合間に交わされる会話が、お互いの趣味や生活について知り合う機会にもなっている。ボランティアの作業中に話すことはできないが、活動を開始する前の隙間の時間や、昼食をとりながら交流がもたれている。会話の内容は、お互いの興味や関心のあることや、最近の体調、近況などである。会員にとっては、会話自体がひとつの活動の楽しみとして捉えられていた。

また、森林や自然に触れながら活動することができるのは、森林ボランティアの特徴でもある。活動は、季節や天候に合わせて実施されていることもあり、季節感を味わいながら作業を行うことができる。毎年同じ活動地で作業をしているため、自分たちで植えた樹木や自

⁶³ 2024 年 12 月 10 日 参与観察より

然に生えてきた山菜などを観察することも一つの楽しみである。前年の活動地の様子との違いを比べながら、作業している様子が見られた。そうしたことを行うことができるのも、同じメンバーが毎年参加しているという状況があってこそだろう。

同じ仲間と継続して活動することが、森林ボランティアの活動を円滑に進めることにもつながっている。活動を共にすることで、お互いの森林整備の技量や作業のスタイルなどがわかってくる。基本的に、個人がどのような作業をするのかは自由であるが、危険な作業を伴う場合には、安全管理の面で誰にどんな作業を任せるのかを考慮する必要がある。これまで一緒に活動を重ねることにより、経験や体力などを把握することができるため、作業の際には自然とそうしたことを加味しながら役割分担ができていく。また、活動中には、作業に没頭する場面もあるが、周りの安全に気を付けながら草刈機などを使用しなければならない作業の時に、常にお互いの状況を観察していた。普段のコミュニケーションやお互いの様子を観察することが日々の活動で継続的に行われていることで、森林ボランティアの活動を滞りなく進められている。

森林ボランティアの活動自体が、共通の目標を持って活動しやすい内容になっており、仲間意識の醸成に寄与している面もある。活動の中には、体力を消耗するものや、夏の暑い日に行われるものなど大変な作業もある。外部の団体から依頼されている作業では特に、一日の作業の到達目標があるため、どのような環境でもその日に作業を完了させなければならないという状況がある。そうした活動を他の会員と協力したり、お互いを労いながら行うことで会員間のつながりがより深くなっている。

一度同じ場所で活動を共にしたからといって、結束が生まれるわけではなく、定期的に顔を合わせる事が重要であることがわかった。シラカンバの活動の中には、1年に2回ほど他の森林ボランティア団体と活動をする機会がある。森林の知識に長けている人や連絡役の人とは、シラカンバの活動にも招待するなど交流が持たれていた。しかし、シラカンバの会員からすると、他の団体の会員は顔見知りではあるものの、相手の名前がわからないなど、必ずしも全員と交流が行われているわけではない。一時的な共同作業の場では、お互いを知り合うほどの深い交流が難しく、共に作業をしている感覚も生まれづらいということがわかった。

以上、シラカンバにおける会員の固定化は、活動の新たな展開に困難を抱えつつも、固定化によって、仲間の間の結束力が生まれ、会員にとって活動しやすい場所になっていたり、体力面など高齢化による問題を乗り越えることにもつながっていると考えられる。活動の展開については、会員が固定されることが、外部に広げた活動を展開する上でスキルやノウハウが蓄積されにくい環境を作っている可能性がある。しかし、会員の目線からすると、同じ仲間が継続して活動することや、内向きのつながりが強くなるのが必ずしも悪い影響を及ぼすわけではなく、さまざまな背景をもった人が参加しやすい環境を作っているという点で、団体の継続に寄与している部分があると考えられる。

4-3 複層的な意味を持つ森林ボランティア活動

第4章では、森林ボランティアにおける高齢化と固定化は、どのようなものなのかを検討してきた。シラカンバにおける高齢化や固定化は、課題として認識されるものでもあった。たとえば、活動している人にとっては、高齢化や固定化の問題に対して、長い作業時間では体力が持たないことや、今後の会の運営が不安定になりうることを自覚していた。しかし、会としての課題は会員に認識されているものの、現時点では会の運営や作業に支障があるわけではないとみられ、早急の課題として議題に上がるなどということにはなかった。シラカンバが、安全講習会を受講した際の講師が言った「作業は3割で、あとの7割は同じ山作業を楽しむ仲間と久しぶりに会えることや仲間との語らいを大切にしたい⁶⁴」という言葉が会員の間で共有されており、会の状況や自分たちの老いを受け入れ、自分たちの楽しみである活動が継続できる形で維持していく方向性になっている。このような状況から、シラカンバは、高齢化や固定化の課題に深刻に向き合うというよりは、シラカンバの一つの特徴としてうまく付き合っているように見える。本節では、シラカンバの活動にある複層的な意味に着目し、どのように高齢化や固定化に適応しながら活動しているのかを考えたい。

シラカンバの森林ボランティア活動は、遊びや居場所、仕事という複層的な要素がある。森林に触れながら他の会員と楽しむという遊びの要素は、シラカンバの活動において土台として考えることができる。活動の中で、山での遊びが共有され、会員は楽しみを感じながら活動を行うことができている。活動場所が森林の中であるからこそ、交流が生まれやすくなっている。ボランティアであるという意識よりも、遊びの要素が中心の活動が意識的に展開されており、年齢や生活環境にかかわらず、どのような会員にとっても参加しやすい活動であるといえる。

また、遊びの土台の上には、居場所の要素があると考えられる。森林での遊びを通じて、同じような興味や関心を持つ人たちが集まった結果、活動や会話が生まれ、会員にとって居心地の良い場所が構築されている。常連の会員が複数人いることは、作業の面でまとまった作業量を行えることにつながっており、外部の作業を委託される際の理由にもなっている。同じ仲間と長い間活動を共にすることは、固定化の懸念があるものの、顔なじみであるということが森林ボランティアの作業にとっても、交流の楽しさの面でも良い影響をもたらしている。

そして、森林ボランティアの活動には、仕事の要素も存在している。会員たちは、森林ボランティアの活動をともに行うことで、仲間意識や仕事への達成感を感じている。また、長い人生経験の中で培われてきた知識が、子どもたちと遊ぶ際の交流に生かされている。高齢化によって、体力面や大がかりな作業ができないなどの課題はあるが、草刈りや育樹に特化することで、無理なく作業が続けられている。そうした草刈りの技術を生かして、造林業者が請け負うことのできない手作業での草刈りを担当するなど、シラカンバの特徴を生かし

⁶⁴シラカンバ機関紙「森の息吹」2024年11月号より

ながら作業ができている。

シラカンバの活動には、遊びや居場所、仕事という要素が複層的に存在することで、高齢化や固定化の特徴をうまく扱いながら活動することで、問題として顕在化することなく、活動を継続することができている。それは、活動にさまざまな意味を持つ森林ボランティアの活動だからこそ実現できているものでもあるといえる。

これまでの先行研究では、高齢化や固定化の課題に対して、組織の継続を考える上で解決すべき問題であるとの考え方が多くされてきた。しかし、シラカンバの活動を見てみると、高齢化や固定化の特徴をうまく生かし、自分たちの変化に適応しながら活動を継続してきたことがわかる。森林ボランティアには、さまざまな種類の活動があり、それぞれに複層的な意味が存在している。高齢化や固定化を議論する際には、会員の活動に対する意味づけや会員の中の関係性を含めた上で議論する必要があるだろう。

5 結論

本研究は、「当別森林ボランティア「シラカンバ」を事例として、会員への聞き取り調査や、活動の参与観察を通して、①森林ボランティアの活動は、会員にとって、また、社会にとってどのような意義があるのか、②森林ボランティアのコミュニティは会員に何をもたらしているのか、を明らかにすることを通して、森林ボランティアは、高齢化や固定化によってどのような影響を受けるのか、そして、高齢化や固定化にどのように適応しながら活動が続いているのかを明らかにすることを目的としている。

第2章では、森林ボランティアの活動のありようを記述するとともに、会員が活動に対してどのような意味を見出しているのかに着目した。森林整備の活動や地域の人たちとの交流など幅広い活動を行う中で、会員たちは活動を通じて経験や学びを得たり、達成感を感じるによって楽しみを見出している。会員は社会への貢献を念頭に活動を行っているわけではないものの、一方で森林ボランティアとして任されている作業に対しては、仕事として遂行している様子があり、何かの役に立っているという自覚があった。森林ボランティアの活動に対しては、楽しみを感じる部分と仕事としてボランティアの役割を全うするということが共存している。

第3章では、森林ボランティアのコミュニティが居場所の側面を持っていることに注目し、シラカンバの活動のどのような特徴が居場所に寄与しているのか、また、居場所があることは会員にとってどのような意味を持つのかについて明らかにした。居場所の要素は、会員の間で交わされる会話や自由に過ごせる雰囲気、役割を担うこと、交流が促進される森林の空間が特徴として挙げられる。森林ボランティアで作られた居場所は、会員にとって自然の中で遊ぶ仲間ができたり、活動内外でのつながりを生む場所として機能している。シラカンバが形成する居場所は、他者とのかかわりや役割を持つことを重視した「社会的居場所」の概念と共通する部分があることがわかった。

第4章では、森林ボランティアにおける高齢化と固定化がどのようなものであるか、そして、高齢化や固定化の課題にどのように適応しながら活動を継続しているかを明らかにすることを目的とした。高齢化については、野口（2017）の分析の視座を参照し、①高齢者ができることをする、②高齢者しかできないことがある、③高齢者もしなくてはならないという3つに分けて、シラカンバの活動を分析した。シラカンバの活動には、高齢者にとって生きがいや楽しみを持って活動できる場所や、長い人生を歩んできたからこそ活躍できる作業、森林ボランティアとして仕事を任される場面があった。これらの分析を含めて、シラカンバにおいて高齢化は、年齢によって活動が定められるのではなく、多様な高齢者が活動する場になっていること、また、高齢者だからこそ活躍できる場が広がっていることがわかった。

また、固定化は、シラカンバの会員にとって居場所を形成することや、森林ボランティアの作業を円滑に進められるという点で、活動に良い影響を及ぼしている。これまで先行研究

では、固定化が、団体の継続を妨げるものとしてみられてきた。しかし、顔なじみのいつもの仲間と活動することが、仲間意識の醸成や、お互いを深く知り合うことにつながっており、結果として会員が長く継続して参加できる環境ができているといえる。

そして、シラカンバにおける高齢化や固定化は、問題であるというよりも、一つの特徴として活動に生かされていた。自分たちの老いや変化をうまく活動に適応させながら、活動を継続してきたともいえる。

しかし、本研究では、森林ボランティアの高齢化と固定化の課題について取り上げたが、検討することができたのはシラカンバだけにとどまっており、全国に存在している森林ボランティア団体の全体を表すものではない。また、今回の調査は、約2年間の調査のみであり、調査期間前の活動を十分に明らかにすることはできなかったため、高齢化や固定化を議論する際の団体の時間の経過による変化などを示すことには至らなかった。

本研究では、森林ボランティアには、活動における遊びや仕事としての意味や、会員にとって居場所の意味が複層的に存在しているという結果から、高齢化と固定化の課題を現場から捉え直す必要性に言及した。これまでの先行研究では、森林ボランティアの高齢化や固定化の課題に対して、現場の活動の様子や会員の語りと関連付けて議論されることは少なかった。本研究で得た知見が、今後の森林ボランティアの発展や、高齢者をはじめとして誰もが活躍できるボランティア活動の環境について考える上での示唆となれば幸いである。

謝辞

本研究を進めるにあたっては、たくさんの方にお世話になりました。この場を借りて心より感謝申し上げます。指導教員である宮内泰介教授には、研究の計画の段階から、論文の執筆まで多大なご指導を賜りました。研究を行う基礎的な知識もない私を、いつでも親身になって導いてくださったことに大変感謝いたします。また、笹岡正俊教授には、講義をはじめ、論文指導ゼミで、研究に対してたくさんのご助言をいただきました。そして、地域科学研究室の学生のみなさんには、励ましの言葉やご意見をいただき、大変心強かったです。特に、博士後期課程の学生のみなさんには、勉強会をはじめとして、日常的に議論に付き合っていていただき、示唆に富んだご指摘を頂戴しました。みなさんのご指導や支えのおかげで、研究を進めることができました。

シラカンバの会員をはじめ関係者のみなさんは、聞き取りに応じてくださったことはもちろん、約2年間にわたる参与観察を快く受け入れてくださいました。学生である私が突然飛び込んだにもかかわらず、みなさんは、私を他の会員の方と同じように接してくれたこと、大変感謝しております。また、活動地までの車で送迎や、森林整備の知識をなにも知らない私に教えてくださったりと、ご迷惑もおかけしたかと思います。シラカンバのみなさんが温かく受け入れてくださったからこそ、このような参与観察を繰り返し行う調査を行うことができました。

本研究にかかわってくださったみなさんのご協力のおかげで、修士論文を完成させることができました。改めて、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 石本雄真, 2010, 「こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所——精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から」『カウンセリング研究』43(1):72-78.
- 上野佳代・菊池和美・長田久雄, 2018, 「国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究——エイジング・イン・プレイスにむけて」『老年学雑誌』8:33-50.
- 市川貴大, 2009, 「都道府県による一般住民が対象の森林ボランティアを育成するための研修や実習等の把握」『野外教育研究』12(2):35-43.
- 大川一郎, 2003, 「老年期と居場所:その心理的意味」『高齢者のケアと行動科学』9(1):3-11.
- 小野奈々, 2013, 「地域環境保全ボランティア活動の対外閉鎖性と活動の非継承性:『行政奉仕の習慣』と『相互鑑賞欲求』の動機づけからの考察」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』10(1):27-36.
- 後藤純, 2023, 「4章 不安を癒す居場所——自分語りの場は自身でつくるしかない」『超高齢社会のまちづくり——地域包括ケアと自己実現の居場所づくり』学芸出版社, pp.42-52.
- 嶋田俊平, 2005, 「森林ボランティアと山村住民との関係性に関する研究:近畿地方の森林ボランティア団体へのアンケート調査結果を中心に」『林業経済研究』51(3):29-37.
- 倉持香苗, 2014, 『コミュニティカフェと地域社会』明石書店.
- 湯艶, 2022, 「コミュニティにおける高齢者の居場所——高齢者によるボランティア活動に注目して」『大手前大学論集』22:129-147.
- 特定非営利活動法人森づくりフォーラム, 2019, 「森づくり活動についての実態調査」
https://moridukuri.jp/wp/wpcontent/uploads/2019/03/H30_moridukuri_survey_report_190329.pdf.
- 富井久義, 2017, 「森林ボランティア活動における社会的意義の語られかた——都市住民が形成するコモンズとしての鳩ノ巣フィールド」『環境社会学研究』23:99-113.
- 当別町, 2015, 「当別町人口ビジョン」
<https://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/uploaded/attachment/9673.pdf>.
- , 2023, 「当別町森林整備計画」
https://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/uploaded/life/45465_82091_misc.pdf.
- , 2024, 「当別町地域防災計画」
<https://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/uploaded/attachment/24478.pdf>.
- , 2024, 「第9期当別町高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」
<https://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/uploaded/attachment/25034.pdf>.
- 日本林業調査会編, 1998, 『森林ボランティアの風——新たなネットワークづくりに向けて』国土緑化推進機構監修, 日本林業調査会.
- 野口寛樹, 2017, 「高齢者のみで組織を運営する:組織論からの分析視角」『商学論集』86(2):39-53.

羽鳥孝明, 2001, 『遊ぶ！レジャー林業：都市からみえる森林がある』日本林業調査会.
北海道開発局, 2022, 「道央圏連絡道路」

https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/douro_keikaku/e9fjd600000019q2-att/gburoi0000000yuou.pdf.

北海道石狩振興局森林室, 2023, 「令和3年「道民の森」の概要」

<https://www.ishikari.pref.hokkaido.lg.jp/sr/srs/douminnomorino-gaiyou.html>.

堀内史朗・森野真理, 2009, 「森林ボランティアの活動が地元林家の森林管理に及ぼす影響」
『吉備国際大学研究紀要』(19):29-35.

松村正治, 2007, 「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方——身近な環境調査による市民デザインの可能性」『環境社会学研究』13:143-157.

——, 2018, 「地域の自然とともに生きる社会づくりの当事者研究——都市近郊における里山ガバナンスの平成史」『環境社会学研究』24:38-57.

宮内泰介, 2024, 「複雑な問題をどう解決すればよいのか——環境社会学の視点」宮内泰介・三上直之編『シリーズ環境社会学講座6 複雑な問題をどう解決すればよいのか——環境社会学の実践』新泉社, pp14-24.

山本信次, 2014, 「社会運動としての森林ボランティア活動:都市と農山村は森林をコモンズとして共有できるか?」『大原社会問題研究所雑誌』671:3-16.

林野庁, 2024, 「令和5年度 森林・林業白書」

<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/r5hakusyo/zenbun.html>.

渡辺真季・三橋伸夫・佐藤栄治・本庄宏行, 2015, 「市民参加型緑地保全活動および住民意識の実態把握——横浜市舞岡町と新治町の比較分析」『日本建築学会計画系論文集』80(717):2545-2555.

Butler, Robert N. and Gleason, Herbert P, 1985, *Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life*, New York: Springer Publishing Company, Inc. (岡本祐三訳, 1998, 『プロダクティブ・エイジング——高齢者は未来を切り開く』日本評論社.)

Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (秋吉 美都・安藤 太郎・筒井 淳也訳, 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)

WHO, 2007, 『WHO『アクティブ・エイジング』の提唱：政策的枠組みと高齢者にやさしい都市ガイド』萌文社.

参考 web サイト

当別森林ボランティアシラカンバ「シラカンバとは」<https://sites.google.com/view/t-shirakanba/%E3%82%B7%E3%83%A9%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%83%90%E3%81%A8%E3%81%AF?authuser=0> (最終閲覧日：2025年1月8日)

当別町「行政区別男女別住民基本台帳人口」

<https://www.town.tobetsu.hokkaido.jp/uploaded/attachment/26475.pdf>. (最終閲覧日：2025

年 1 月 8 日)